

WIENER PHILHARMONIKER

1977

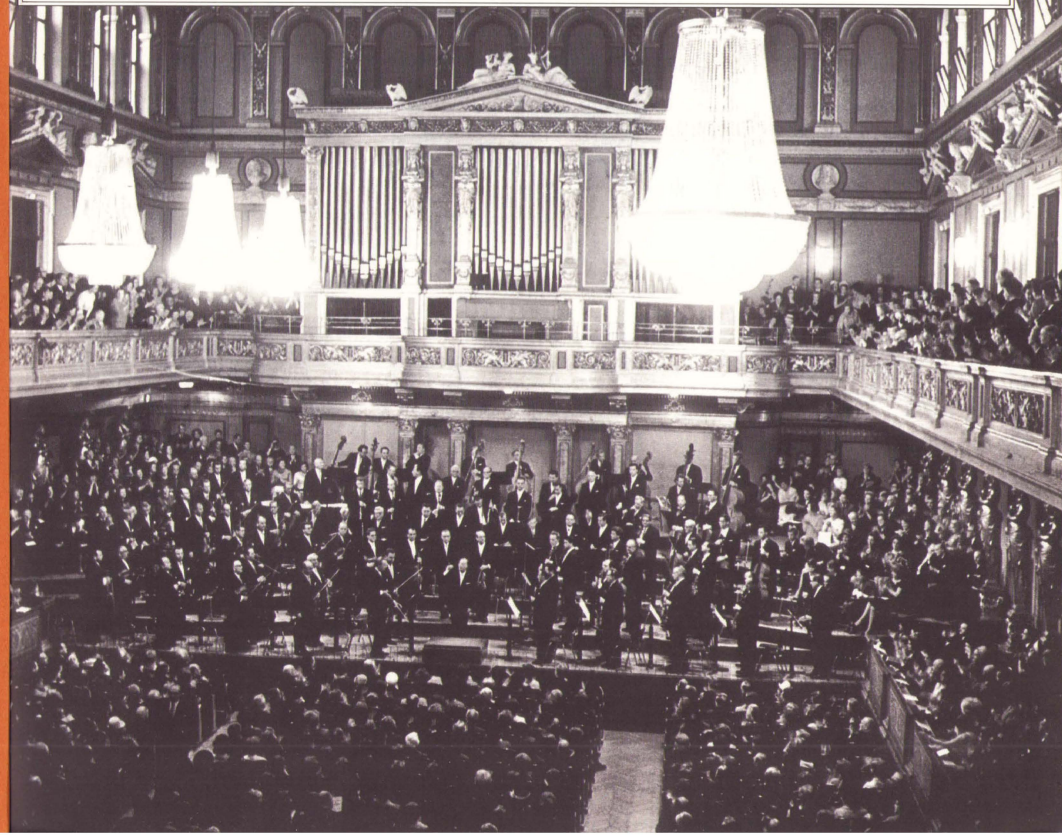


WIENER PHILHARMONIKER

DIRIGENTEN: KARL BÖHM / CHRISTOPH VON DOHNÁNYI

SOPRAN: ANJA SILJA

1977





Es ist mir eine besondere Ehre und Freude, die erste Grussbotschaft des Jahres 1977 einem fuer die kulturellen Beziehungen zwischen Japan und Oesterreich so gewichtigen Ereignis wie dem neuerlichen Auftreten der WIENER PHILHARMONIKER in Japan widmen zu duerfen.

Es ist bereits das sechste Mal, dass Oesterreichs "erfolgreichste Botschafter", wie die WIENER PHILHARMONIKER oft genannt werden, mit dem gesamten Ensemble in dieses Land zu Gaste sind. Sie setzen damit eine Tradition fort, die wie im Jahre 1956 begonnen haben und die inzwischen die Bank zu einem wesentlichen Element in den Beziehungen unserer beiden Laender werden liess.

Das Orchester steht wieder unter der bewahrten Stabfuehrung von Generalmusikdirektor Professor Dr. Karl Böhm, dem bereits vor zwei Jahren ein auch fuer Japan ganz aussergewöhnlicher Erfolg beschieden war und der des ebenfalls weltweit bekannten Dirigenten Christoph von Dohnányi.

Ich wuensche unserem traditionsreichen, nunmehr 135 Jahre bestehenden Orchester, seinen beruehmten Dirigenten, aber auch den Veranstalter dieser neuerlichen Japantournee den gewohnten Applaus und Erfolge. Darüberhinaus hoffe ich, dass diesem musikalischen Ereignis eine weitere Bruecke der Zuneigung schlagen moege zwischen Ihrem und unserem Land.

Dr. Franz Weidinger

Dr. Franz WEIDINGER
Oesterreichischer Botschafter
in Japan

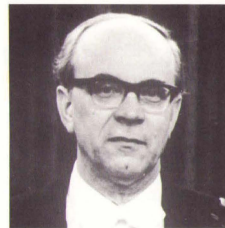
1977年最初の御挨拶を、日本とオーストリアの文化関係にとって極めて重要なできごとであるウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の来日に関してお送りできることは、私にとって格別の名誉であり喜びであります。

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団は、オーストリアの「最良の大使」であるといわれておりますが、1956年に初来日して以来、この管弦楽団を率けての日本公演は今回で6回目になります。音楽を両国間の交流関係の中の主要な要素として来たこれまでの伝統を、この日本公演によって更に維持発展させることとなるでしょう。

この管弦楽団は2年前にもケネルムジック・ディレクター 教授ドクター カール・ベームの定評ある指揮によって、日本で素晴らしい成果を挙げましたが、今回はそのベームの他に同じく世界的指揮者であるクリストフ・フォン・ドホナーニの指揮で演奏します。

私は、本年で135年目になるこの豊かな伝統をもつオーケストラおよび著名な両指揮者、そしてこの日本公演を企画された方々に、これまでと同じく賞讃と成功がもたらされることを切望します。更に私はこの音楽公演が貴国とオーストリア両国間の新たな友好の懸け橋となることを心から願っております。

在日オーストリア大使
Dr. フランツ・ヴァイディンガー



The Vienna Philharmonic Orchestra are celebrating their 135th anniversary this year. In 1842, when the orchestra was founded by Otto Nicolai, nobody could have imagined that the Vienna Philharmonic would one day travel the whole world. Travelling activities started exactly 100 years ago, when in 1877 the orchestra was invited to participate in the first music festival in Mozart's town. The first journey abroad was the orchestra's concert tour to Paris in 1900 under Gustav Mahler's direction.

This visit in 1977 is our sixth encounter with the Japanese audiences and the Japanese musical scene. Our first tour of Japan, more than two decades ago, was conducted by Paul Hindemith (who had come to replace the recently deceased Erich Kleiber); during subsequent tours, in intervals of 3 to 4 years, the Vienna Philharmonic played under the baton of Herbert von Karajan, Georg Solti, Claudio Abbado, Karl Böhm and Riccardo Muti. This time, we will again be appearing together with Karl Böhm and also with a conductor who is new for Japan: Christoph von Dohnányi.

There are, of course, special reasons why the Vienna Philharmonic has always accepted invitations to Japan with such particular pleasure: the extremely well-informed and enthusiastic audiences, for example; the outstanding management and meticulous tour-organization; the pleasant hotels where we enjoy the famous Japanese hospitality; and last not least the opportunity to meet with our numerous friends and colleagues.

Indeed, whenever we land in Tokyo, it is somewhat like coming home - at the airport the Viennese musicians are welcomed by friends, colleagues - many of them former pupils - and even family: for some of our members have found their wives in Japan.

As President of the Vienna Philharmonic Orchestra I would like to present my greetings and compliments to the Japanese audiences and to all our friends. I would like to express my sincere satisfaction that our Honorary Conductor, Dr. Karl Böhm, has been able to join us once more for concerts in Japan, and together with all my colleagues of the Vienna Philharmonic Orchestra I hope that our sixth tour of Japan will again bring pleasure and joy to all music lovers in Japan.

Wilhelm Hubner
Professor Wilhelm Hubner
President of the Vienna Philharmonic
Orchestra

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団は、本年135年目を迎えます。1842年にオットー・ニコライによってこのオーケストラが設立された頃には、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団が、いつの日か世界中を演奏旅行するであろうなどということは、誰も想像できなかったと思います。演奏旅行活動は今からちょうど100年前の1877年に始まりました。この年モーツァルトの廟で行われた第1回音楽祭に招待されました。また最初の外国公演は1900年のグスタフ・マラーの指揮によるパリ演奏旅行でした。

1977年の今回の日本訪問は日本の聴衆の皆様や日本の音楽文化状況に接することのできる第6回目の機会になります。私共の最初の日本公演は20年以上も前のことで、その時の指揮者はハウル・ヒンデミットでした。(ヒンデミットは近年逝去したエーリッヒ・クライバーの後任でした。)それ以後の訪日は3〜4年の間隔で行われてきました。これらに同行した指揮者はヘルベルト・フォン・カラヤン、ゲオルク・ショルティ、クラウディオ・アバド、カール・ベームおよびリカルド・ムーティでした。今回、私共は再びカール・ベームと共に演奏しますが、同時にもうひとりの指揮者クリストフ・フォン・ドホナーニを日本の皆様にも御紹介します。

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団が、いつもとりわけ大きい喜びをもって日本からの招待を受けてきたことには特別の理由があります。その中には聴衆の皆様が音楽に通じた熱心な方々であること、すばらしいマネジメントと心のゆきとといった旅行手配、広く知られている日本人の暖かいもてなしを味わうことのできる快適なホテル、数多くの友人や仲間の人々に会えることなど、その他数多くの理由があります。

東京に着いた時、いつもまるで自分の国に帰って来たような気持ちになります。空港で私たちウィーンの音楽家たちは友人たちや仲間の人々の出迎えを受けます。その中にはかつて教え子だった人々も多くいます。さらに家族の方々も——私たちの楽員の中には何人か日本の女性と結婚している者がいるのです。

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の理事長として、私は日本の聴衆の皆様や私共のすべての友人の方々にごあいさつをお送りいたします。また私共の名譽指揮者ドクター カール・ベームが再び日本公演に参加できたことを心から嬉しく思っております。そしてウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の楽員全員と共に、この第6回目の日本公演でもまたすべての日本の音楽愛好家の皆様に喜ばしめていただけることを望んでおります。

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 理事長
Prof. ウィルヘルム・ヒューブナー

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 ●日本公演●1977年2月～3月●

2月22日<火>	6時30分	札幌	北海道厚生年金会館	曲目F	主催＝北海道新聞社・北海道文化放送・道新文化事業社
2月24日<木>	6時30分	福岡	福岡市民会館	曲目F	主催＝TNCテレビ西日本
2月25日<金>	6時30分	広島	広島郵便貯金会館	曲目F	主催＝RCC中国放送
2月26日<土>	7時	名古屋	名古屋市民会館	曲目F	主催＝CBC中部日本放送
3月1日<火>	7時	東京	東京文化会館	曲目D	主催＝毎日新聞社・新芸術家協会
3月2日<水>	7時	東京	NHKホール	曲目A	主催＝毎日新聞社・新芸術家協会
3月3日<木>	7時	東京	NHKホール	曲目A	主催＝毎日新聞社・新芸術家協会
3月4日<金>	7時	東京	NHKホール	曲目B	主催＝毎日新聞社・新芸術家協会
3月5日<土>	6時30分	新潟	新潟県民会館	曲目E	主催＝NST新潟総合テレビ 後援＝オーストリー大使館
3月7日<月>	6時30分	金沢	金沢市観光会館	曲目F	主催＝北陸放送・北国新聞社・北国文化センター・石川県音楽文化協会
3月8日<火>	7時	大阪	大阪フェスティバルホール	曲目D	主催＝毎日新聞社・大阪コンサート協会
3月9日<水>	7時	大阪	大阪フェスティバルホール	曲目A	主催＝毎日新聞社・大阪コンサート協会
3月11日<金>	7時	東京	東京文化会館	曲目C	主催＝毎日新聞社・新芸術家協会
3月12日<土>	7時	東京	NHKホール	曲目C	主催＝毎日新聞社・新芸術家協会

提供＝新芸術家協会

WIENER PHILHARMONIKER ●Concert Schedule●1977 Japan●

February	22	Tues.	SAPPORO	Hokkaido Kosei-nenkin Kaikan	Program F
February	24	Thur.	FUKUOKA	Fukuoka Shimin Kaikan	Program F
February	25	Fri.	HIROSHIMA	Hiroshima Yubin-chokin Kaikan	Program F
February	26	Sat.	NAGOYA	Nagoya Shimin Kaikan	Program F
March	1	Tues.	TOKYO	Tokyo Bunka Kaikan	Program D
March	2	Wed.	TOKYO	NHK Hall	Program A
March	3	Thur.	TOKYO	NHK Hall	Program A
March	4	Fri.	TOKYO	NHK Hall	Program B
March	5	Sat.	NIIGATA	Niigata Kemmin Kaikan	Program E
March	7	Mon.	KANAZAWA	Kanazawa-shi Kanko Kaikan	Program F
March	8	Tues.	OSAKA	Osaka Festival Hall	Program D
March	9	Wed.	OSAKA	Osaka Festival Hall	Program A
March	11	Fri.	TOKYO	Tokyo Bunka Kaikan	Program C
March	12	Sat.	TOKYO	NHK Hall	Program C

Presented by NEW ARTISTS ASSOCIATION



カール・ベーム

オーストリア音楽総監督、博士、教授

オーストリアで国が指揮者に与える最高の称号である〈オーストリア音楽総監督〉を授けられた唯一の現代最高の大指揮者。カール・ベームは、1976年の8月から9月にもザルツブルクでオペラ「コシ・ファン・トゥッテ」「イドメネオ」を計7回上演し、ウィーン・フィルをザルツブルク、ルツェルン、エディンバラ音楽祭で、ベルリン・フィルをベルリンで、またザルツブルクではドレスデン・シュターツカペレをも指揮するというように82歳の誕生日をむかえた高齢とも思えない活躍ぶりを示している。1976年秋より今年にかけても、1月ウィーンにおけるR.シュトラウスの記念コンサートで「影のない女」「ナクソス島のアriadネ」「エレクトラ」を指揮し、サンフランシスコ歌劇場で「影のない女」、ウィーン国立歌劇場で「魔笛」、パリ・オペラ座で同じく「魔笛」と「後宮よりの逃走」を指揮、夏のザルツブルク音楽祭では、「コシ・ファン・トゥッテ」「ドン・ジョヴァンニ」を指揮する他、ロンドン交響楽団とベートーヴェンの交響曲第7番その他を、ボリーニを独奏者に迎えてウィーン・フィルと、モーツァルトのピアノ協奏曲第23番およびブルックナーの交響曲第7番を指揮することになっている。ウィーン・フィルとは、昨年9月の定期演奏会でモーツァルトの協奏交響曲K.297b、ブルックナーの交響曲第7番を、今年1月のニコライ・コンサートでベートーヴェンの交響曲第9番を指揮した他、多くの演奏会、レコード録音が予定されている。

カール・ベームは1894年8月28日、オーストリア第2の都市グラーツで、グラーツ歌劇場の法廷顧問であった弁護士を父に生れ、グラーツの大学で法律を修めて「法学博士」の学位をとったが、幼少の頃から音楽に対する情熱をおさえることができず、グラーツ音楽院に通い、1913年20歳の時ウ

ィーンで、ブラームスの親友であり、著名なマンディ・チェフスキーに和声・対位法・作曲を学び、3年間軍務に服した後1917年グラーツ歌劇場の合唱練習教師として指揮者の道を歩みはじめた。1919年にオペラ指揮者としてデビューし、1921年にはカール・ムツクの推薦でミュンヘン歌劇場へ移り、1927年よりダルムシュタット州立劇場の音楽総監督となった。1931年にハンブルク国立歌劇場のオペラ指揮者に就任、3年後の1934年よりドレスデン国立歌劇場の音楽総監督を務め、オペラと管弦楽団をヨーロッパ第一級のものに育てあげた。この間R.シュトラウスに評価されて、オペラ「無口な女」(1935年)および「ダフネ」(1938年)の世界初演を行った。

1943年にはウィーン国立歌劇場の指揮者となり、戦後は1951年までブエノスアイレスのコロン劇場で活躍した後、1953年にウィーン国立歌劇場の音楽総監督に迎えられた。その後はシカゴ交響楽団の指揮や1957年のメトロポリタン歌劇場での「ドン・ジョヴァンニ」「ばらの騎士」で来日にも登場、大きな感銘を与えて人気を獲得した。ウィーン・フィル、ベルリン・フィルなどを定期的に指揮する他、ザルツブルク音楽祭には毎年出演、バイロイト音楽祭にも1962年に「トリスタンとイゾルデ」で登場以来、1969年には「ニーベルンゲンの指環」全曲を上演して第一級のワーグナー指揮者ともなった。以来今日まで、世界の巨匠として約60年にもおよぶ驚異的な活動を続け、正確無比、精緻で自在で高貴な精神を持つヨーロッパ音楽の最も深いものと伝統を体現した大音楽家として全世界の讃仰を受けている。わが国には、1963年ベルリン・ドイツ・オペラ、1975年ウィーン・フィルを各々率いて、二度訪れている。

KARL BÖHM

General Music Director of Austria, Professor, Doctor.

Received the highest honored title that the Austrian Government has ever given to a conductor.

Being celebrated his eighty-second birthday on August 28 last year, Karl Böhm has been active during the concert season in spite of his age. He gave seven performances of "Cosi fan tutte" and "Idomeneo" in Salzburg last summer, then conducted "Die Frau ohne Schatten" at San Francisco Opera House, "The Magic Flute" at Vienna State Opera and Paris Opera House. "Cosi fan tutte" is to be conducted this summer. In addition to the opera performances, last summer he conducted Vienna Philharmonic in Salzburg, Luzern and Edinburgh, Berlin Philharmonic in Berlin, and Staatscapelle Dresden in Salzburg. He also conducted Vienna Philharmonic at the subscription concerts in September 1976 (Bruckner's Seventh Symphony), and in January 1977 (Nicolai-Concert: Beethoven's 9th Symphony). In between these major performances, he appeared in innumerable concerts and recordings.

Karl Böhm was born in Graz in 1894. Although he received his doctorate in law from Graz University, he established his career in music which he was very much interested in from childhood. After studying at Graz Conservatory he went to Vienna in 1913 when he was twenty. In 1917, he found a position in Graz Opera as a Korrepitor, and two years later, he conducted the opera performance there for the first time. He was invited to State Opera in Munich in 1921, then to State Opera in Darmstadt in 1927 as GMD. In 1931 he engaged to work for Hamburg State Opera as opera conductor. In 1934, he became the general music director at Dresden State Opera House, and made its opera and orchestra to be one of the best in Europe. Then, he came to Vienna State Opera in 1943.

After spending several post-war years until 1951 at Teatro Colon in Buenos Aires, he was called back to Vienna State Opera House as general music director in 1953. Meanwhile he appeared to the U.S. audience with conducting Chicago Symphony, "Don Giovanni" and "Der Rosenkavalier" of the Metropolitan Opera in 1957 and received high praises and appreciation.

In addition to the responsibilities of Vienna and Berlin Philharmonics, he participates in Salzburg and Bayreuth Festivals regularly. It is amazing that Karl Böhm has been keeping the top position in the world of music for over sixty years, and yet continuously receiving the respects of all music lovers from every part of the world as the greatest artist of the century who succeeds the spirit of genuine authentic tradition of highly refined European music.

He visited Japan twice, with German Opera Berlin in 1963 and with Vienna Philharmonic in 1975.



クリストフ・フォン・ドホナーニ

フランクフルト・アム・マイン市立劇場音楽総監督・オペラ監督

クリストフ・フォン・ドホナーニは1929年以來フランクフルト・アム・マイン劇場の音楽総監督兼オペラ監督であり、1977年の秋よりハンブルク国立歌劇場のインテンダント兼音楽監督就任が決まっている他、ミュンヘン、ウィーン、ザルツブルクなどの著名音楽祭、メトロポリタン、サンフランシスコ、シカゴ、ウィーン、コヴェントガーデンなどの大歌劇場、ベルリン・フィル、ウィーン・フィル、シカゴ交響楽団その他、欧米の主要なオーケストラを指揮して活躍している。

クリストフ・フォン・ドホナーニは、1929年9月8日ベルリンに生れた。クリストフの祖父は作曲家であり、名ピアニスト、指揮者、教育者として著名なエルンスト・フォン・ドホナーニである。エルンストは、1960年ニューヨークで世を去るまで音楽家として広く活躍、約50曲にも昇る後期ロマン派的な名作を残し、またコンセルヴァトワールの院長として、ブダペストのフィルハーモニー協会の指揮者として特にウィーンとのつながりの深い人である。父のハンス・フォン・ドホナーニは法律家であった。そのため彼は先ず父親と同じくミュンヘン大学で法律の勉強をしていたが、そのかわらフルート、ヴァイオリン、トラムベックおよび声楽を学び、1948年には完全に音楽家への道を選んだ。

1951年には指揮科の卒業生としてミュンヘン市からリヒャルト・シュトラウス賞を得、その間アメリカに渡って、フロリダ州立大学で教鞭をとっていた祖父のもとで勉強を続け、またタングルウッドで行われたレナード・バーンスタインの指揮コースでも学んだ。

1952年にドホナーニはドイツに戻り、ゲオルク・ショルティの推薦でフランクフルト・アム・マインの劇場にコレパティオール兼合唱指揮者として招かれ、その5年

後の1957年には、オペラおよびコンサート的首席指揮者としてリューベックで契約する事となり、28歳の若さでドイツ最年少の音楽総監督となった。

1963年より66年にかけてカッセル歌劇場へ移り、また同時に1964年より1969年まで西ドイツ放送(WDR)のケルン放送交響楽団の首席指揮者も兼任、1968年にフランクフルト・アム・マインの音楽総監督となり、ミュンヘンの国立歌劇場、ベルリン・ドイツ・オペラ等へも招かれて活躍した。

ドホナーニは、指揮者としてミュンヘンの国立歌劇場、ベルリン・ドイツ・オペラで活躍するほか、ベルリン・フィルとのコンサート、その他多くのヨーロッパやアメリカのオーケストラを指揮している。

特に1966年には、ザルツブルク音楽祭で、ハンス・ヴェルナー・ヘンツェのオペラ「ディ・バックスアレン」の初演を指揮して絶讃を博した。また、1974年にはウィーン音楽祭でモーツァルトの「魔笛」、ベルクの「ルル」、R.シュトラウスの「サロメ」、他、驚くほど激しい喝采を浴びたシェーンベルクのオペラ「モーゼとアロン」も指揮した。また1975年、ウィーン国立歌劇場での「マイスタージンガー」の初演も同様にセンセーションを巻き興し、同年11月のウィーン・フィル定期における「未完成」「ヴォツェック」抜萃(独唱アニア・シリヤ)「ペトルーシユカ」も高評を得た。ウィーン国立歌劇場では1976年12月にアイネムのオペラ「たくらみと恋」の初演を指揮した他、このシーズンにはサンフランシスコでヤナーチェクの「マクロボスの場合」、ミラノ・スカラ座で「モーゼとアロン」、コヴェントガーデンで「アラベラ」、フランクフルトで「オテロ」「トリスタンとイゾルデ」「ボリス・ゴドゥノフ」を指揮することが決まっている。

CHRISTOPH VON DOHNÁNYI

General Music Director and Opera Director of Frankfurt am Main City Theater

Christoph von Dohnányi was born in Berlin on September 8, 1929. His grandfather, Ernst von Dohnányi, was a well known composer, pianist, conductor and music educator. Grandfather Ernst, died in New York in 1960, left over fifty master pieces of late Romantic style music. Before he moved to serve as a principal of the conservatory in New York, he was a conductor of Philharmonic Association in Budapest, having kept much relation to Vienna Music School. Christoph's father was a lawyer. Therefore, he first studied law at the University of Munich where his father also studied. At the same time he took flute, violin, trumpet and voice lessons, and in 1948 he chose his career to be a musician.

At his graduation from the conducting course in 1951, he was awarded the "Richard Strauss Prize" from Munich city. While he was at school he pursued conducting studies with his grandfather, who at the time was teaching at Florida State College in the U.S. He also attended the conducting course led by Leonard Bernstein in Tanglewood.

After returning to Germany in 1952, he was invited to be a korrepetitor and a kapellmeister at Frankfurt am Main Opera recommended by Georg Solti. Then in 1957 he made a contract as a chief conductor of opera and concert with the state opera of Lübeck. Thus he became the youngest general music director in Germany at the age of 28.

He then moved to Kassel Opera in 1963, and stayed there for three years. At the same time he also held the position of the chief conductor of the WDR's Cologne Broadcasting Orchestra from 1964 to 1969. He came back to Frankfurt am Main as general music director in 1968. He also appeared as a guest conductor at State Opera in Munich, German

Opera in Berlin, Berlin Philharmonic Orchestra and in many other opera houses and concert halls in Europe and the U.S., including Covent Garden Theater, Metropolitan Opera House, San Francisco, Chicago and Vienna Opera. In 1966, he conducted the premier performance of Hans Werner Henze's opera "Die Bassariden" at Salzburg Festival, and marked a phenomenal success. He gave other remarkable performances of Mozart's "The Magic Flute", R. Strauss' "Salome", Berg's "Lulu" and Schönberg's "Moses and Aron" during the Vienna Festival in 1974.

He won remarkable success at noted Festivals as Munich, Vienna, Salzburg, and in conducting such leading European and American orchestras as Vienna Philharmonic, Berlin Philharmonic and Chicago Symphony Orchestra.

During the season of 1976-77, besides Gottfried von Einem's first performance of "Conspiracy and Love" performed last December at Vienna State Opera, he conducts Janáček's "The Makropoulos Affair" in San Francisco, "Moses and Aron" at The Scala, "Arabella" at the Covent Garden, "Othello", "Tristan and Isolde" and "Boris Godunov" in Frankfurt.

アニヤ・シリヤ

ソプラノ

ンサートを行った。15歳でリート・リサイタルを開き、一躍人々に知られるようになった。次いで1956年にベルリン市立歌劇場で「セビリアの理髪師」のロジーナ役でデビュー、ブラウンシュヴァイク国立劇場を経て1958年にはシュトゥットガルト国立オペラ劇場、1959年にはフランクフルト・アム・マインの劇場に登場した。1959年にはエクス・アン・プロヴァンス音楽祭で「魔笛」の夜の女王を歌って好評を博し、続いてウィーン、ハンブルグ、パリでも出演した。1960年、1961年にはバイロイト音楽祭で「さまよえるオランダ人」のゼンタを歌ってセンセーションをまきおこし、以来バイロイトで、ワーグナーの種々の役を歌って大成功をおさめ、ヨーロッパ、アメリカの多くの著名な歌劇場でも客演しており、1967年には「バイロイト」日本公演で来演した。

その他ロンドン、シカゴ、ブダペスト、ミュンヘン、サンフランシスコ、ニューヨーク、メトロポリタン、ウィーン、パリ、ケルンなどの著名歌劇場や音楽祭に出演、「フィデリオ」「トスカ」「カルメン」や種々のワーグナー作品の他、R.シュトラウスの「サロメ」、プロコフィエフの「炎の天使」、ヤナーチェクの「カーチャ・カバノヴァ」「マクロプロスの場合」、シェーンベルクの「期待」、ベルクの「ルル」「ヴォツェック」、クセナキスの「メディア」、ハレヴィの「ユダヤの女」、ワイルの「マホガニー」などの近代・現代オペラを数多くレパートリーとしており、特にシェーンベルクの「期待」は、ショルティ、ドホナーニ、ギーレン他の指揮で度々歌って絶讃を博している。

アニヤ・シリヤはベルリンに生れ、両親は共に俳優であった。祖父が子供の歌の才能に気づき、8歳で声楽の勉強を始め、10歳の時にはベルリンのティニア宮殿でコンサートを行い、続いてハンブルグでもコ

ANJA SILJA

Soprano

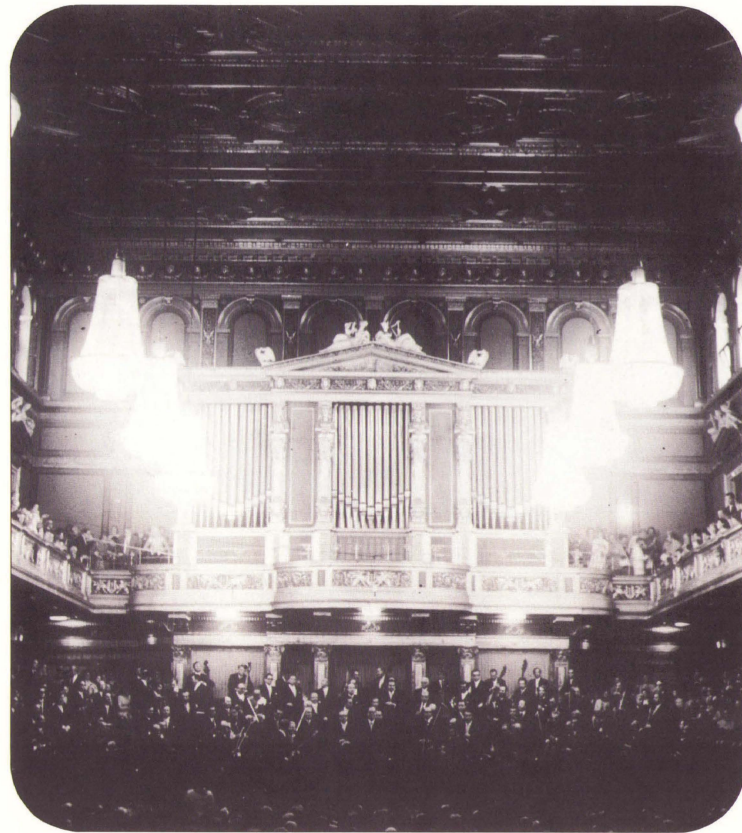
Having actor and actress parents, Anja Silja, born in Berlin, started taking voice lessons at the age of eight by the recommendation of her grandfather, who noticed the child's ability. Her first public appearance took place in the Royal Palace of Titania in Berlin and then in Hamburg when she was ten. But she became widely known by her German song recital given five years later. Her operatic debut was made as Rosina in "The Barber of Seville" at Berlin City Opera in 1956. After participating in Braunschweig State Opera, she went to Stuttgart State Opera in 1958 and Frankfurt am Main in 1959. In the same year she sang with much success the part of The Queen of Night in "The Magic Flute" at Aix-en-Provence Festival, and also appeared in Vienna, Hamburg and Paris.

Since her sensational success by singing the part of Senta in "The Flying Dutchman" at Bayreuth Festivals in 1960 and 61, she sang many Wagner roles there as well as at other leading opera houses and festivals in Europe and the U.S., such as New York, Chicago, San Francisco, London, Paris, Cologne, Munich, Vienna and Budapest.

Anja Silja's wide repertoire covers from the classics to modern; "Fidelio", "Tosca", "Carmen", many Wagner's operas, R. Strauss' "Salome", Prokofiev's "The Flaming Angel", Janáček's "Kat'a Kabanova" and "The Makropoulos Affair", Schönberg's "Expectation", Berg's "Lulu" and "Wozzeck", Xenakis' "Medea", Halevy's "Juedin" and Weill's "Mahogany". She successfully sang the part of "Expectation" many times under Solti, Dohnányi, Gliel and at several other occasions.

This 1976-1977 season, besides the first performance of Einem's "The Conspiracy and Love" with remarkable success at Vienna State Opera, she sings in Brussels, Cologne and San Francisco.

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団



1841年、当時の宮廷歌劇場管弦楽団を指揮していたオットー・ニコライが、オペラ以外にオーケストラの演奏会を開くことを提案し、翌1842年3月28日同管弦楽団が第1回演奏会を開いたのが、今日のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏会の始まりである。それ以前の1833年に演奏会をおこなった記録もあり当時の指揮者フランツ・ラハナーはオペラの幕間にベートーヴェンの交響曲を演奏したりしたといわれているが管弦楽団としては1842年を創立の年としている。「フィルハーモニー・アカデミー（音楽会の意）」と銘打った第1回演奏会は皇帝一家も臨席して大成功をおさめ、年2回の定期演奏会を開くこととし、第2回は11月27日、第3回は翌1843年3月19日に開かれた。第3回はベートーヴェンの第九交響曲を演奏したが大きい反響をよび、3月24日、ベートーヴェンの命日に再演の臨時演奏会を開くほどであった。

初代指揮者、オットー・ニコライは1847年の春まで11回の定期演奏会を指揮し、楽員の社会保障のための演奏会をも催し、地位向上につくしたので楽員は感謝の意をこめて自分たちの恩給基金、共済基金にオットー・ニコライの名をつけ、そののち1887年以後はこの基金のための「ニコライ・コンシャート」が開催されるようになり、今日までつづいている。

ニコライがベルリンへ去ったため新しい歌劇場指揮者ゲオルク・ヘルメスベルガーが引継いだ。1850年までに4回しか演奏会を行わず、しばらく中絶した。

1854年に就任したカール・エッケルトが再開し、その初演奏ではアンリ・ヴェータンを招いてメンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲ホ短調を初演するなど意欲的に活動した。

1860年になって、真の再興の主導権を楽員がとり、委員による自主運営をするよう



ウィーン国立歌劇場

になり、これは今日までつづいている。5回の演奏会をおこなった歌劇場の総監督の地位を失ったエッケルトがウィーンを去ったあと、秋に楽員の選考によってオート・デゾフが指揮者に選ばれる。定期を年4回とし、制度化した。この若き指揮者デゾフによって、フィルハーモニーのプログラムには、ワーグナー、ベリオーズ、リスト等の新しい音楽をプログラムに組み、一シーズン（年間）8回に演奏会をふやすなど、1875年まで15年間に100回以上の指揮をした。その間1870年には「ムジックフェライン・ザール」が完成した。ムジックフェライン（楽友協会）は、もとはアマチュア音楽家の集まりで、1831年以来定員600のホールで協会のコンサートを開いてきた。ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団は、この新しい大ホールでの第1回演奏会は1870年11月30日におこない、これは今日までの本拠となっているが管弦楽団は自主性を守るため協会を組織には加わらず、借受人として音楽会を主催してきた。1875年4月11

日、デゾフはベートーヴェンの「第九」を宮廷歌劇場の歌手たちも加わったコースとともに演奏してウィーンを去った。デゾフの後任はハンス・リヒターで、1875年32歳で引継ぎ、ブラームス、ブルックナー、ドボルザーク、チャイコフスキー、R. シュトラウス、ワーグナーといった同時代の作曲家の作品を積極的に演奏し、長年の伝統に新風を吹入れた。1898年までの23年間、243回の定期を指揮した。その間1877年にはデゾフの指揮でザルツブルクの音楽祭でも初演演奏し、リヒターのもとで演奏旅行もおこなうようになっていた。

1898年にグスタフ・マラーが主席を継いだ。この大作曲家は、近代的な指揮者としての地位、芸術作品の責任ある解釈者であり絶対的な統率者としての立場を確立した。1900年ウィーン・フィルとして初の海外公演（パリ万国博）を行ったが、楽員、客席との間がもつれ、3年で去った。次のヨセフ・ハルメスベルガー（1901-1903）のときから常任の指揮者をやめ、複数の指揮者

を招くようになり、1908年までの間には、エルンスト・シュッ、フェリクス・モットル、カール・ムック、アルトゥール・ニキシュ、フランツ・シャルク、リヒャルト・シュトラウスなどが指揮台に立った。この間にもマラーも協会演奏会での指揮台に立ち、ウィーン・フィルで第3、第5交響曲を初演するなど、1907年までその関係は保たれた。

1908年宮廷歌劇場の総監督フェリクス・ワインガルトナーが復活した主席に選ばれ1927年まで指揮をする。楽団はベルリンへR. シュトラウスの指揮で演奏旅行し、1922年にはワインガルトナーが率いて南米の楽旅を行って成功をおさめた。1917年には公開総練習を行ない、今日まで前日の土曜日の午後におこなわれる定期コンサートになっている。ブルーノ・ワルターも1912年に特別演奏会でマラーの第9交響曲を初演するなど指揮台に立っていた。

1927年11月19日、ウィルヘルム・フルトヴェングラーが最初の指揮をした。その非凡な手腕は、待望されていたものとして大歓迎され、ドイツ諸都市やロンドンへその指揮のもとに旅行したが、フルトヴェングラーはベルリン等での仕事が多忙がため主席を辞任、1930年クレメンス・クラウスが登壇、シェーンベルク、プロコフィエフ、オケルゲルなどの作品を数多く初演した。1934年クラウスが去って以後、主席指揮者を一人に限定しないこととなり、今日までそれはつづいている。1937年頃までにはフルトヴェングラー、ワルター、トスカニニ、クナッパーツブッシュなどが数多く指揮した。オーストリアがナチス・ドイツに併合させられていた第2次大戦中もフィルハーモニーの活動をつづけ、フルトヴェングラー、デ・サバター、クレメンス・クラウス、カール・ベーム、クナッパーツブッシュ、メンゲルベルクなどが定期演奏

会の主な指揮者であった。戦後はさらにカラヤンが加わり、全世界のすべてのクラシック・ファンにとって、もっとも深い敬愛と、もっとも熱い憧憬をもたれている世界の名門中の名門として、また「ウィーン」を代表するのみならず、クラシック音楽の歴史そのものの歴史をになうオーケストラとして、不動の地位を保っている。最近ではカール・ベームの他、クラウディオ・アバド、レナード・バーンスタイン、クリストフ・フォン・ドホナーニ、ズービン・メータ、リッカルド・ムーティ、ゲオルク・シヨルティ、ベルナルド・ハイティンク、ロリン・マゼール、ホルスト・シュタインなどがその指揮台に立っている。

オーケストラのメンバーは国立歌劇場で演奏する国家公務員であり、自主的に運営するフィルハーモニー管弦楽団としての定期演奏会は年間8回（土曜の午後と日曜の午前の2回ずつ16回のコンサート）とニコライ・コンサート及びフルトヴェングラーの名を冠した演奏会の計10回、楽員数は現在136名。定期演奏会や毎年のザルツブルク音楽祭への出演、国外演奏旅行、レコード録音の他に、ウィーンの名物になっている1935年以後のオペラ・バル（オペラハウスでの舞踏会）、ムジックフェラインのホールでのフィルハーモニー・カーニバルでの演奏、1925年のヨハン・シュトラウス100年祭以来の伝統となったワルツやポルカを演奏するニューイヤー・コンサートなどがある。ウィーン・フィルは国立歌劇場備え付けの古い型の水管楽器などを使用し、統一された伝統的な音色を保っている。わが国には、1956年バル・ヒンデミット、1959年ヘルベルト・フォン・カラヤン、1969年ゲオルク・シヨルティ、1973年クラウディオ・アバド、1975年カール・ベームおよびリッカルド・ムーティに率いられて5回訪れ、いずれも絶讃を博した。

DIE WIENER PHILHARMONIKER



Vienna Philharmonic Orchestra (The word "Wiener Philharmoniker" may sound more familiar for those who love this orchestra) has been adored and respected by all music fans of the world for a long period of time. It symbolizes Vienna as "The Capital City of Music" and represents "The History of The European Classical Music" itself.

The glorious chapters of the Orchestra was opened on March 28, 1842, when Otto Nicolai, the conductor of the Vienna Royal Opera House Orchestra, began a series of concerts under the name of "The Philharmonic Concerts". The series held their regular concerts twice a

year, one in spring and the other in fall. At the third concert of the Orchestra, March 19, 1843, the program was obliged to be played twice when the performance of Beethoven's "Ninth Symphony" took place. It was so excitedly acclaimed by the audience and their enthusiastic desire was so strong that the extra concert was held on March 24, the anniversary of the composer's death.

Georg Hellmesberger succeeded the baton from its twelfth concert in 1847, but the remarkable progress was achieved by Karl Eckert who premiered Mendelssohn's "Violin concerto in E minor" with Henri Vieuxtemps at his first appearance

with the Orchestra in 1854. Eckert doubled the number of the annual performance from two to four in 1860. In the same year, the management was reorganized to be operated by players themselves. As the result, Otto Dessoff was elected to be the conductor who remained for the next fifteen years. Meanwhile, in 1870, the building of Musikvereinsaal was completed as the home ground of the Orchestra and the annual concerts were stretched to eight.

It was in 1875 that Hans Richter, a thirty-two years old Horn player appeared to its podium. For twenty-three years until 1898, he led 243 subscription concerts and raised the

Orchestra up to its glorious throne. He took the works of his contemporaries on the program; Brahms, Bruckner, Dvořák, Tchaikovsky, R. Strauss and Wagner.

Since then, the conductors of the Orchestra include the world leading maestros; Gustav Mahler (1898-1901), Joseph Hellmesberger (1901-3), Franz Schalk (1903-8), Karl Muck (1904-6), Felix Mottl (1904-7), Richard Strauss (1906-8), Felix von Weingartner (1908-27), Wilhelm Furtwängler (1928-30, 1938-45), Clemens Krauss (1930-33), Bruno Walter (1933-38), Artur Nikisch, Arturo Toscanini, Hans Knappertsbusch, Szell often played with this Orchestra. Recently Bohm, Karajan, Solti, Bernstein, Maazel, Dohnányi, H. Stein, C. Abbado, Mehta, Muti are mainly heard.

Besides its subscription concerts the Orchestra is regularly active in Salzburg Festival since its opening in 1877, The Grand Ball at The Opera House since 1935, and especially the annual New Year's Philharmonic Ball in January since 1925 is world wide known, which started commemorating the one hundredth anniversary of Johann Strauss at the time.

The official status of the one hundred and thirty six players is a civic employee, and they are to play at The Opera House every night, so that the concerts must be held on Saturday afternoons and Sunday mornings. The conductor is to be chosen by the decision of the players. Most of the members are Austrian, especially born and raised in Vienna. Many of them are relatives.

The instruments are supplied by the Opera House to help maintain the historical heritage. Some of the brass instruments are those of old fashioned and require special techniques, but the players are eager to overcome the problems to preserve the traditional "timbre".

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

コンサートマスター

ゲアハルト・ヘッヴェル
ライナー・キュッヒル
エーリヒ・ビンダー
ウェルナー・ヒンク

第1 ヴァイオリン

ヴォルフガング・ボドゥシュカ
グスタフ・スウォボダ
アントン・シュトラウ
エタハルト・ザイフェルト
エドゥアルト・ラリス
フリッツ・ライターマイヤー
ハンス・ノヴァク
ゲオルク・ベトリ
フリッツ・ケリー
アルフレート・シュター
アルフレート・ウエルト
ヘルベルト・シュミット
ヘルムート・ブッフラー
ヘルベルト・フリュハウフ
ペーター・グッツェル
パウル・グッゲンベルガー
ゲアハルト・リベンスキー
ヘルベルト・リンケ
マンフレート・クン
アルフレート・アルテンブルガー
ギュンター・ザイフェルト

第2 ヴァイオリン

ウィルヘルム・ヒューブナー
ペーター・ウェヒター
ハンス・ヴォルフガング・ワイース
マリオ・バイヤー
フランク・フィッシャー
オットー・ネチウス
アルフレート・シュビラー
ウルター・シュトゥッパフスキー
ヨゼフ・コンドル
エルンスト・バルトロメイ
ウィルヘルム・マタイス
オットー・オットマイアー
エドヴィン・ウエルナー
ハインツ・ハンク
アルフォンス・エグガー
クリスティアン・ツァロデク

ヴィオラ

ルドルフ・シュトレング
ヨゼフ・シュター
ヘルムート・ヴァイス
ギュンター・プラチンバッハ
クラウス・バイスタイナー
ペーター・ベッヒャ
ロベルト・ニッチュ
ゲオルク・パタイ
カール・シュティアホフ
パウル・フェルスト
ウルター・プロフスキー
クルト・アンダー
ゲアハルト・リトシャウアー
ギュンター・スコーガン
ゴットフリート・マルティン
エーリッヒ・カウフマン
エドゥアルト・クドラク

チェロ

ロベルト・シャイワイン
ヴォルフガング・ヘルツァー
フランク・バルトマイ
ゲイター・ギェルトラ
フリードリヒ・ドニツァル
ホルスト・ウイックラー
ルットヴィヒ・バビカル
ウェルナー・レーゼ
ラインハルト・レープ
アダルベルト・スコッチ
フランク・クローツァー
ラインホルト・シーグル
ゲアハルト・カウフマン
イェルゲン・フォーク

コントラバス

ブルクハルト・クロイトラー
ヘルベルト・マンハルト
ホルスト・ミンスター
マルティン・ウングアー
アルフレート・プラナフスキー
フルディナント・コサーク
ヴォルフガム・ゲルナー
ラインハルト・デュラー
ゲアハルト・フォルマネク
ミラン・サガート
ルドルフ・デーゲン

ハーブ

ハラルト・カウツキー

フルート

ウェルナー・トリッパ
ヘルベルト・レスニチュク
ヴォルフガング・シュルツ
ルイス・リヴィエール
マインハルト・ニーダーマイヤー
ルドルフ・ネクヴァシ

オーボエ

ゲアハルト・トッレチュク
ウルター・レーマイヤー
フルディナント・ラーブ
ギュンター・ロレンツ
ゴットフリート・ボイジッ

クラリネット

アルフレート・ブリント
ペーター・シュミードル
ホルスト・ハイェク
アルフレート・ボスコフスキー
ウイリー・クラウゼ
クリスティアン・クバシ

ファゴット

エルンスト・バンベル
ディートマル・ツェーマン
フリッツ・ファルト
カ・ロ・エールベルガー

ホルン

ローラント・ベルガー
ヴォルフガング・トムベック
ギュンター・ヘグナー
フォルカー・アルトマン
ウイバルト・ヤネジ
ローラント・バル
フランク・ゼルナー
ヨゼフ・ヴェレバ
ヨハン・フィッシャー

トランペット

アドルフ・ホラー
ウルター・ジンガー
ヨゼフ・ボムベルガー
ヘルムート・ウェビッ
ヨゼフ・ヘル

トロンボーン

ルドルフ・ヨーゼ
ヨゼフ・ローム
エルンスト・シャイト

テューバ

ヨゼフ・フンメル

打楽器

フランク・プロシュク
ホルスト・ベルガー
ローラント・アルトマン
ヴォルフガング・シュスター
クルト・プリホダ
フランク・ザマツァル

楽譜・楽器係

ロレンツ・ゴツェ

ヴァイオリン技術者

オットマール・ラング

セクレタリー

ブリギッタ・グラバナー

●このメンバー表は正メンバーとしてウィーン・フィルハーモニー管弦楽団から発表されているものです。

DIE WIENER PHILHARMONIKER

Concertmasters

Gerhart HETZEL
Rainer KÜCHL
Erich BINDER
Werner HINK

1st Violins

Wolfgang PODUSCHKA
Gustav SWOBODA
Anton SERAKA
Eckhard SEIFERT
Eduard LARYSZ
Fritz LEITERMEYER
Hans NOVAK
Georg BEDRY
Fritz KERRY
Alfred STAAR
Alfred WEIT
Herbert SCHMID
Helmut PUFFLER
Herbert FRÜHAUF
Peter GÖTZEL
Paul GUGGENBERGER
Gerhard LIBENSKY
Friedrich DOLEZAL
Ewald WINKLER
Ludwig BEINL
Werner RESEL
Reinhard REPP
Adalbert KOČIC
Franz KREUZER
Reinhold SIEGL
Gerhard KAUFMANN
Jürgen FOG

2nd Violins

Wilhelm HÜBNER
Peter WÄCHTER
Hans Wolfgang WEIHS
Mario BEYER
Franz FISCHER
Otto NESSIZIUS
Alfred SPILAR
Walter STUDENOVSKY
Josef KONDR
Ernst BARTOLOMEY
Wilhelm MATHEIS
Edwin OTTMAYER
Wolfram WEINER
Heinz HANKE
Alfons EGGER
Christian ZALADEK

Violas

Rudolf STRENG
Josef STAAR
Helmut WEIS
Günter BREITENBACH
Klaus PEISTEINER
Peter PECHA
Robert NITSCH
Georg PATAY
Karl STIERHOF
Paul FÜRST
Walter BLOVSKY
Kurt ANDERS
Eduard LITSCHAUER
Günter SZKOKAN
Gottfried MARTIN
Erich KAUFMANN
Eduard KUDLAK

Violoncellos

Robert SCHEWEIN
Wolfgang HERZER
Franz BARTOLOMEY
Dieter GÜRTLER
Friedrich DOLEZAL
Ewald WINKLER
Ludwig BEINL
Werner RESEL
Reinhard REPP
Adalbert KOČIC
Franz KREUZER
Reinhold SIEGL
Gerhard KAUFMANN
Jürgen FOG

Double basses

Burkhard KRÄUTLER
Herbert MANHART
Horst MÜNSTER
Martin UNGER
Alfred PLANAVSKY
Ferdinand KOSAK
Volker ALTMAN
Reinhard DÜRRER
Gerhard FORMANEK
Milan SAGAT
Rudolf DEGEN

Harps

Harald KAUTZKY

Flutes

Werner TRIPP
Herbert REZNICEK
Wolfgang SCHULZ
Louis RIVIERE
Meinhart NIEDERMAYER
Rudolf NEKVASIL

Oboes

Gerhard TURETSCHKEK
Walter LEHMAYER
Ferdinand RAAB
Günter LORENZ
Gottfried BOSITS

Clarinets

Alfred PRINZ
Peter SCHMIDL
Horst HAJEK
Alfred BOSKOVSKY
Willi KRAUSE
Christian CUBASCH

Bassoons

Ernst PAMPERL
Dietmar ZEMAN
Fritz FALT
Camillo ÖHLBERGER

Horns

Roland BERGER
Wolfgang TOMBOCK
Günter HÖGNER
Volker ALTMAN
Wilhelm JANECZIK
Roland BAAR
Franz SÖLLNER
Josef VELEBA
Johann FISCHER

Trumpets

Adolf HOLLER
Walter SINGER
Josef POMBERGER
Helmut WOBISCH
Josef HELL

Trombones

Rudolf JOSEL
Josef ROHM
Ernst SCHEIT

Tuba

Josef HUMMEL

Timpani & Percussion

Franz BROSCHEK
Horst BERGER
Roland ALTMANN
Wolfgang SCHUSTER
Kurt PRIHODA
Franz ZAMAZAL

Orchestra attendant

Lorenz GOTSCH

Violin Maker

Othmar LANG

Secretary

Brigitta GRABNER

PROGRAM A

3月2日：東京／MARCH 2: TOKYO
3月3日：東京／MARCH 3: TOKYO
3月9日：大阪／MARCH 9: OSAKA



《ベートーヴェン没後150年記念》

指揮：カール・ベーム Conductor: Karl Böhm

ベートーヴェン
Beethoven

交響曲 第6番 ヘ長調 作品68 「田園」
Symphony No. 6 F major, Op. 68 "Pastorale"

- I. Allegro ma non troppo
— Erwachen heitiger Empfindungen bei der Ankunft auf dem Lande
(いなかに着いたときの愉快な気分)
II. Andante molto mosso — Scene am Bach (小川のほとり)
III. Allegro — Lustiges Zusammensein der Landleute (いなかの人々の楽しいひととき)
IV. Allegro — Gewitter, Sturm (雷とあらし)
V. Allegretto — Hirtengesang, frohe und dankbare Gefühle nach dem Sturm
(牧歌 あらしのあとの喜びと感謝)

ベートーヴェン
Beethoven

交響曲 第5番 ハ短調 作品67
Symphony No. 5 c minor, Op. 67

- I. Allegro con brio
II. Andante con moto
III. Allegro
IV. Allegro

PROGRAM B

3月4日：東京／MARCH 4: TOKYO



《ベートーヴェン没後150年記念》

指揮：カール・ベーム Conductor: Karl Böhm

ベートーヴェン
Beethoven

交響曲 第2番 ニ長調 作品36
Symphony No. 2 D major, Op. 36

- I. Adagio molto — Allegro con brio
II. Larghetto
III. Scherzo: Allegro
IV. Allegro molto

ベートーヴェン
Beethoven

交響曲 第3番 変ホ長調 作品55 「英雄」
Symphony No. 3 E flat major, Op. 55 "Eroica"

- I. Allegro con brio
II. Marcia funebre: Adagio assai
III. Scherzo: Allegro vivace
IV. Allegro molto

PROGRAM C

3月11日：東京／MARCH 11: TOKYO
3月12日：東京／MARCH 12: TOKYO



指揮：カール・ベーム Conductor: Karl Böhm

モーツァルト
Mozart

交響曲 第29番 イ長調 K. 201
Symphony No. 29 A major, K. 201

- I. Allegro moderato
II. Andante
III. Menuetto: Allegretto
IV. Allegro con spirito

R.シュトラウス
R. Strauss

交響詩 「ドン・ファン」 作品20
Don Juan, Symphonic poem Op. 20

ブラームス
Brahms

交響曲 第2番 ニ長調 作品73
Symphony No. 2 D major, Op. 73

- I. Allegro non troppo
II. Adagio non troppo
III. Allegretto grazioso (Quasi andantino)
IV. Allegro con spirito

指揮：クリストフ・フォン・ドホナーニ Conductor: Christoph von Dohnányi
独唱：アニヤ・シリヤ (ソプラノ) Soloist: Anja Silja, soprano

シューベルト
Schubert

交響曲 第8番 ロ短調 「未完成」
Symphony No. 8 b minor, "Unfinished"

- I. Allegro moderato
II. Andante con moto

ワーグナー
Wagner

前奏曲とイゾルデの愛の死《優しくかすかな彼のほほえみ》
楽劇「トリスタンとイゾルデ」より
Vorspiel und Isolde Liebestod "Mild und leise wie er lächelt"
Aus "Tristan und Isolde"
独唱：アニヤ・シリヤ (ソプラノ)
Soloist: Anja Silja, soprano

PROGRAM D

3月1日：東京／MARCH 1: TOKYO
3月8日：大阪／MARCH 8: OSAKA



ベートーヴェン
Beethoven

交響曲 第7番 イ長調 作品92
Symphony No. 7 A major, Op. 92

- I. Poco sostenuto — Vivace
II. Allegretto
III. Presto
IV. Allegro con brio

て、明確に推察されるところ。畢竟、あの
ように、至極その長年にわたる優れた音楽の
歴史と、風格そのものの調練の賜物となら
ない。だが、それがまた、他面、彼の
音楽活動のうしろに自然と派生した頑強な
演奏の態度ともウィークン付けしたところ
にもなった。ひいては、彼らと性的のわ
め指揮者へ巡り達したところには、指揮者
を軽視した、彼らからのタキに依る自演
に至ることさえなしとしないのである。ひ
いては、彼らが現代の指揮者たちと歩容
を起しているものも名高い達になった。か
のマーラーとの経緯、比較的最近では、
フルヴェグナー・ウーランシュタットとの
相知のころであらう。でも、このころ
と天晴というはない。安齋楽団の実力と
して世界といわれている以上もまたそこ
に起因のものもいろいろある。

ウィーン・フィルハーモニーについて、いさぎやかにほめあげたらしいのといふ。あらためて弦がどうの管がどうのといってみても仕方があります。だいたいこの演奏会を選んでこられたかたがたなら、ウィーン・フィルのたぐいえない美質に誘われてのことなのですからなさることと言わねばなりません。

ひとによって言葉のうでの言い表わしかたは多少異っても、ウィーン・フィルがかなでる音楽の独特の美しさに関してはほとんどばらつきのない印象ができてあつていように思われます。そしてそれは西洋のオーケストラのプロトタイプと感じさせる質感、外装を保持して深い歴史の信頼性を基本の力としながら、ある自由な時代的流動性をそのうに映し出してゆくという、その二つの面の微妙・柔軟な兼ね合いのうに成立しているといえましょう。考えてみればこれほど微妙な性格をもっているながら、これほどはっきりしたイメージをきき手の内に定着させているオーケストラというものはいません。ウィーン・フィルという呼称でさえが、もう日常の音楽に關する会話のなかでは最も美しい言葉のひとつになってしまっているのです。

オーケストラというのは、現代の私たちの前のかたは完全に機能的なもの、つまり音を発する音楽の道具として思い浮かべられます。それをひとつの人格とか個性とかを含めて見るという習慣はもうすたれてしまいました。そうしなくてもそうではなくていかにここにきてしまいました。だからA・フィルハーモニー、B・交響楽団などいっても、とりかえることのないためにつけられた名札のようなもので、ましてその名そのものが美しく、快く耳にひびくなどということはほとんどありません。その点、ウィーン・フィルは断然違います。その固有の美がそれにもしっかりつかまれば、

ウィーンのまちを存立させるもの

●大木 正興

正体を知られつくし、承認されつくすのうでの、そしてかたに単に言葉のうでの合致・合意でないのだから、ウィーン・フィルという固有な詞が実にひろびろとした豊富なニュアンスを含有する美語にさえてしまうのも無理のないことでありましよう。

もちろんウィーンという地名そのものが西洋音楽においてやはり単なる地名以上のものであることそれは無関係ではないでしょう。実際それは私にはたいへん不思議な都です。ウィーンについてあれこれ調べてみたところで、あの都の不思議な体質は頭ひなめて知的に積み上げて現出するもの、これはつまりイメージをきき手の内に定着させているオーケストラというものはいません。ウィーン・フィルという呼称でさえが、もう日常の音楽に關する会話のなかでは最も美しい言葉のひとつになってしまっているのです。



くれています。私などはやはりウィーンがウィーンであるというのには、現在ではウィーン・フィルの存在によってであるといきって少しも過言ではないような気がするのです。もしかりにあの都が、かつて大音楽家たちが住んだ家々とか、劇場とかをただ豊富に所有しているだけの遺跡のまちでしかなかったら、それはもう音楽という住人がとうにひき去ったゴースト・タウンでありましよう。いかに首都として立派なホテルや店があつたとしても音楽的にはそうであるはずで。

あの都が音楽を命としていま美しく生きているのは、ひとえにフィルハーモニーの活動がその職としての役割を果たしているからで、数々の音楽的遺跡はもちろんのこと、その風景も街全体もまたこのオーケストラの音楽的豊かというにひとを呼ぶものとしてここに生きていると言うこと

ができそうです。夏がよというころ、ウィーンは例のフェストヴォッヘンが終り、それからかなり私どもには退屈な都市になりかゝりますが、世界中から押寄せていた音楽家たちが潮がひくようにいなくなり、ウィーン・フィルさえもザルツブルクなどの音楽祭に出かけたといったものからこのウィーンにさえないが音楽的なものへの離隔から集めてきているひとびとを見ながら、私はウィーン・フィルの音楽が現にそこにはなくても、それが過去の無数の音楽的痕跡や風景にまで人を呼ぶ生命を賦与していることをしみじみと感じたものでした。

まことにウィーン・フィルはウィーンそのものであります。ウィーンがウィーン・フィルを所有しているのではなく、むしろウィーン・フィルがウィーンを存立させている。そういうたちのオーケストラがどこかにどこにあるでしょう。ですからウィーン・フィルはあつてはベートーヴェンやブルックナーとシュトラウスは見事に並び立つ。どんな意地悪なき手でもそれらを並べさかされても、なんということ、なと顔をしかめはしないやうです。

私がウィーン・フィルハーモニーという名前を知ったのはずいぶん古い。父が持っていたレコードのなかに、シャルカがウィーン・フィルを振った「運命」のレコードがあつて、私は、小学校の2、3年の頃から、しょっちゅうこのレコードをきいていたからである。もちろん、40年近くも前のレコードだから、音色とか何かといったものはうかがいようもなかったろうが、このレコードで始めて「運命」に接して全身的な感銘を受けたということもあつて、ウィーン・フィルという名前は、私の記憶の深い部分に消しようもなく刻みこまれたやうだ。

以後、このオーケストラによるレコードをいったいどれほどきいたか、もちろん数えようもない。少年時代きいて記憶に残っているものかを思いひくまにあげてみると、ワルターが指揮とピアノを受けたモーツァルトの二重奏K.466のピアノ協奏曲があり、モーツァルトのいくつかの交響曲があり、マーラーの「大地の歌」がある。ワインガルトナーが指揮をしたベートーヴェンの8番や9番の交響曲がある。というわけで、おさない私の耳が、このオーケストラの音色やスタイルによって色濃く染めあげられたことは確かである。私は、音楽好きの友人と、モーツァルトの短調K.550の交響曲のコードは、ワルター、ウィーン・フィルのもの、トスカニーニ、BBC交響楽団のものどちがよいかなどといったことについて、あつくなつて論じあつたものだ。もちろん私は、断乎たる、ワルター、ウィーン・フィル派だったのである。

というわけで、ウィーン・フィルという名前は、私のなかでほとんど神話的存在と化したのだ。実際にその音楽を演奏に接したのは、ごく最近のことになる。ウィーン・フィルはすでに5回来日している

というわけで、ウィーン・フィルという名前は、私のなかでほとんど神話的存在と化したのだ。実際にその音楽を演奏に接したのは、ごく最近のことになる。ウィーン・フィルはすでに5回来日している

感想

●栗津 則雄



わけだが、第1回のときは、私の方からまじい貧乏時代で切符を買うところのさびげなやつたし、1973年の第4回来日ときは、何とも間の抜けたものに、うまいや、ど入れかゝりに私がウィーンに出かけていたのである。もちろん、来日しているとは言っても、ウィーン・フィルが一人残らずいなくなるわけではない。私は、国立劇場での「ハルジファル」や「ローエングリン」や「魔笛」などの伴奏を通して、彼らの片鱗に触れることは出来たのだが、おそ

らく主力メンバーがごっそり抜けているというせいもある。このときの演奏の出来ばえは、長年をくんで来た私の夢に近づいたもの、何とも申しかねた。もちろん、けしてつまらぬというわけではなく、特に管の響きなどには、私が聴きなれていたフランスのオーケストラとはまた異なる涼しい色づきがあつてそれはそれで面白かつたのだが、私の期待が大きかつただけに、がっかりしたというのが正直なところだろう。まあ何となく無難にやっつてのけているとい

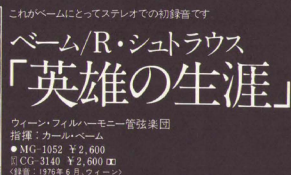
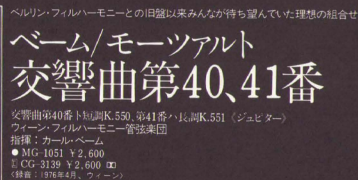
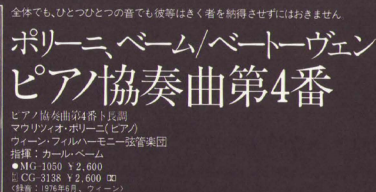
う程度にすぎなかったのである。

というわけで、私は、一昨年、彼らが5度目の来日をしたとき、はじめてこのオーケストラを、コンサートというかたちできくことが出来た。ウィーンでのあまり楽しくない思い出があるものだから、「またまた、すかされるんじゃあるまいな、ペームの指揮だから大丈夫だろうが」となどと思いながら出かけたのだが、幸いにして、私の危惧は杞憂に終わった。杞憂に終わったところではない。私は、そのとき、音楽をきく楽しみの極限を味わっているような思いをしたのである。オーケストラの性能という点では、その少し前にきたクリウランド交響楽団の歴然とするほどの完備さには及ぶまい。アイザックは時に乱れるし、アンサンブルだって、この程度のものなら他にいくらもあるだろう。そうは思うのだが、クリウランド交響楽団をきいたときは、感心しながらもどこか冷やかにその演奏を眺めていた私が、今度は、いやおうなく、音楽の流れのなかに全身を引き入れられたのである。それも、たとえばベルリン・フィルのように、圧倒的な力によって引きずってゆくというふうにはない。気がついてみると、私は、いつのまにか音楽の流れに身を委ねていたやうだ。ごく上質の酒を飲んだときのように、身体のみずみずまで、ごく自然な酔いめづりていて、安酒のように、頭や身体の一部だけでなく、かたつづなるようなことはない。私は、その充実した流れに身を委ね続けていることが、何とも快かつたものだ。うまいオーケストラなら、今後もいくらも出てくるだろうが、こういうオーケストラは、たぶん、少くなる一方だろう。ウィーン・フィル自体にしても、いつまでこういう状態が続くか知れたものではない。そう思うと、またまたこのオーケストラがきけることが、実に楽しみなのである。



ENER PHILHARMONIKER

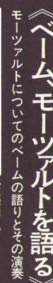
最新録音
来日記念盤3点
好評発売中



グラモフォン終身専属者としてのベームの全ディスコグラフィは、次頁に掲載されておりますので、ご参照下さい。

グラモフォンレコード・発売元/ポリドール株式会社

特別レコード（カセット・テープ）

[illegible]

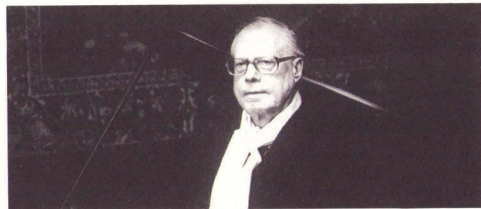
リヒャルト・ワーグナーがひひざクセン説りてしゃべっていたことは、有名な話である。もともと、フランスのようにパリ中心の中央集権国でなく、地方地方に王様や、侯爵や、伯爵などの領主が治めていたドイツだから、方言についても、おもしろ多彩なのである。ワーグナーの「タンホイザー」が上演されてまもなく、ウィーンの制作家兼俳優のネストロイは、例の未来音楽を諷刺する、この歌劇のパロディ版を書き下ろし、上演して成功を取めた。現在はそのレコードがでているが、現代風にアレンジされた、この版の冒頭に付け加えられたシーンでは、英国でワーグナーとネストロイが喧嘩と、ザクセン説りとウィーン説りてやり合う場面があり、ドイツ人ならばきっと腹をかかえて笑うことだろう。その中で、ワーグナーがネストロイに、パロディを作ったことを聞いたさくんだりで、迷惑さみの口調で、*「なるほど、タンホイザーのネストロイ版もあってよからう。何しろ聞くところによると、近頃、地上では、(ベームのトリスタン)とか、(ブルーメンのワルツァール)なんぞという代物があつたらうから」と*語っているのはおかしくかった。

ワーグナーのザクセン説りに対して、われらがゲルル・ベームはシュタイエルマルク説り、あるいはグラーツ弁をしゃべる。数々の実況録音やレコードなどで、ベームの肉声を聞かれた方も多いと思う。多少しわからぬ味だが、温かみのあるパリトンである。

1934年に、ベームが、ワーグナーも楽長を勤めたドレスデンのザクセン国立管弦楽団の指揮者に就任したとき、楽員のヒツヒツ話を立ち聞きた件は、ベーム自身が回想録のなかで語っていることである。ベームのグラーツ弁について「少くとも、流りのことなら、はくたちは是めて勉強しな

カール・ベーム——その人と芸術

●高辻 知義



くてもいい。先生の方言ならみんな知っているから」と話していたというのであるが、それはベームの先任者の一人であるエルンスト・フォン・シュップもグラーツの出身だったからである。

ともかく、ベームの肉声は耳に快いが、彼のグラーツ説り、はおそらく、彼の音楽をもいくぶん彩っているのかもしれない。かくは、1964年のベルリン・ドイツ・オペラの来日公演のとき、また、1966年夏のバイロイトの、有名な「トリスタン」録音のときなどに、ベームの練習風景に接することのできたが、指揮台の椅子から舞台上の歌手にもつづいて「クリスタ」とか、シェイムズとかと親しく呼びかける群々揃いは印象に残っている。もっとも、日生劇場での「フィデリオ」のブローペでは、カメラマンたちのシャッターの音に、ベームがゆんしゃくを立てて、彼らを追い出してしまったようなことがあったと覚えている。

また、日生劇場の公演のときには、僕は通訳のはしぐれを勤めていたので、大開眼一語一語ともに公演のはたあとと、ベームを道とつたでた帝国ホテルまで、手をとって護送する楽に溺したことも忘れられな

い。つまり、僕はベームと握手でない握手をしたわけである。

自伝にも書いていることだから、ご存知の方も多いだろうが、ベームはオーストリアは南部のシュタイエルマルク州の首都グラーツの生れではあるが、先祖はチェコのボヘミアから移住してきたということである。ベームという名前自体が「ボヘミア人」ともいうほどの意味なのであるが、先祖はボヘミアにいたころからベームと名乗っていたのか、オーストリアへ移ってからそうになったのか、それはわからない。オルガニストのアルベルト・シュヴァイツァーは、ドイツ占領時代のアルザス（又はエルザス）の出身であるが、このシュヴァイツァーつまり「スイス人」という名前も、スイスからの移住者を意味するのかも知れない。

さて、ベームの故郷グラーツであるが、人口22万余、オーストリア第二の都会と聞かされてもピンと来ない人が多いだろう。オーストリア東南部の平原と、アルプスの先端とが接触する辺りに位置するこの町は、温暖な気候に恵まれていて、その静かな環境を貫いて、移り住む人も多いと言われる。

たわむれにこの町に冠せられた「ペンシオノボリス」、つまり「年金生活者の町」のあだ名は、この間の消息を語っているようである。オーストリア・ハンガリー二重帝国の公卿にせしめ、疲れ、引退した役人、軍人たちが、数知れずこの町にその余生を送ったのである。

これも自伝に書かれていることだが、ベームは、この町の大学で法学博士の称号を得ている。これは何名名誉博士などという、儀礼的な授与ではなく、青年時代に在籍して、多少泥なわな勉強ではあるが、正真正正の試験に受かって獲得した学位なのである。その意味では、ベームは、世界的には、エリート階級に属する筈の人間だった。彼が音楽家の経歴をすてて、学位と肩書きを他の面に生かしていたら、少くともシュタイエルマルク州での重要な人物にはなっていたらう。

しかし、彼は、自らの生れつきの素質・性向に従い、ミューズの女神たちの導くままに、音楽家の道を選んだ。この面では、彼はエリートとして出発したわけではない。彼の生家の環境がきわめて音楽的であったことは申すまでもないが、グラーツの高校の恩師ヴァイス先生、またブラームスの親友であったオイゼビウス・マンディチエフスキーといった優れた師にめぐりあったことは彼の幸運の一つである。しかし、彼は、のちに「オーストリア国家音楽総監督」という最高の名誉ある称号に象徴される位置までに達する、長くはかな音楽家の経歴を「一兵卒」の地位から始めて、一歩一歩踏み進めて行かなければならなかったのである。

グラーツの歌劇場は、最近の統計で見ても、年の予算が十数億円（その8割程度は公共団体からの補助である！）、<アイヴ・ブ・ジャク・フリー>、<神々のたそがれ>、<フィデリオ>などの堂々としたレパートリー

に加え、たとえばブリッテンの「ヴェニスに死す」などの新作も上演するというクラス劇場であるが、その傘下、通常の演劇やオペレッタを上演する劇場・舞台もある。今日流に言えば、その「劇作」をする練習指揮者のポジションから、ベームは始めたのである。高い声が出ないから、3度下げて伴奏してくれなど、歌手から注文が出るのは毎度のことという、音楽の修羅場できたえられたことが、ベームにとってこの上ない修業になったろうことは想像にたない。

実際、今世紀の前半まで、ドイツ、オーストリア系の音楽界に育った指揮者はすべて、地方歌劇場の舞台裏から始まる下積み生活を経歴しながら、大きく成長していったのである。ベームにも、よい意味での楽員



気質がたつぷり見られるのは、そのせいであろうか。客演、客演で国から国、都市から都市へとジェット機でつぎつぎと廻っている。今日の若手のスター指揮者たちとは、まったく別世界の住人のような気がする。

いつぞや音楽番組の解説者がしゃべっていたことで興味深かったことがある。たしか、ブラームスの交響曲の演奏のしかたで、いわゆる原典版ではなく、オーケストラが慣行的に使用している版（それは楽員たちにとっても都合のよいものである筈だ）をベームが使っているということなのであった。今日の若い指揮者なら、原典批判ということをやかましく言って、その版を揃えさせることだろうという話だったが、まさにベームにふさわしい魂語だと思った。

オーケストラの前に立て、ただ、リス

ムと表情についてだけサインを与えるのが、指揮者の勤めであり、それ以外のことはすべてショウである。ベームは言うが、まさに至言であり、この至言を体現しているのが、彼の指揮ぶりだと思う。ベームは決して器用な人とは思えないが、単なるパト・テクニックとか器用さをはるかに越えた處に、彼の芸術は達しているようだ。前回の来日の折、また日本を訪れたい、とベームは語っていた。彼の高論のことを考えて、僕はそれはまず不可能だろうと思っていた。しかし、ここに彼とウィーン・フィルハーモニーの来日が実現してみると、ベームはやはり日本が好きなのだな、という至極当然な感概をもたぬわけには行かない。

優雅な1日——帝国ホテル

やすらぎに満ちた憩いのひととき

落ち着いた格調高い1,300の客室は、お泊りいただばかりではなく心からくつろぎたいだけの満ちた空間。東京にご出張の方、休日をお過ごしの方、ご宿泊にはゆとりとくつろげる帝国ホテルをお選びください。90年の歴史から生まれるキメ細かなサービスと設備、最高の環境が充実した1日を約束いたします。



なごやかに語らいながら、豊かな味覚を。

帝国ホテルのレストランで、ご家族や、親しい方と一緒に食事のひとときをお過ごしください。美味しい料理と心あたまる雰囲気にお話しもはります。

〈フレンチブルー〉(17階)
洗練されたフランス料理の真髄
12:00~14:00 18:00~22:00(日曜休業)

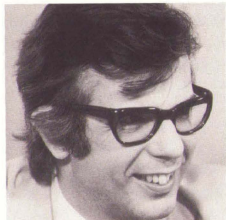
〈グリルルーム〉(中2階)
豪華な肉料理の味わい
12:00~14:00 17:30~21:30

〈ブルエニエ〉(中2階)
四季折々の新鮮な海の味覚
12:00~14:00 17:30~21:30(土曜休業)

帝国ホテル

〒100 東京都千代田区千代田1-1-1
TEL (03) 554-1111

札幌案内所 TEL (011) 241-2472 / 名古屋案内所 TEL (052) 231-1206 / 大阪案内所 TEL (06) 441-0601 / 福岡案内所 TEL (092) 451-2129



わたしがドホナーニの名をはじめて知ったのは、ウィーンの「ツアーリンデ・ウン・リンデン・ケルラ」というレストランに行った時であった。それは、ウィーンの国立歌劇場の修復再建のこけら落としの年だったから、いまから22年前、1955年の12月のことである。

音楽会やオペラが終わったあと、わたしはちょいちょいそこに飲みに出かけた。そして、ふとしたことから、そのレストランの老ビアニストと盆を共にするようになった。老ビアニストは、ラヴェルのソナチネやホルトークのミクロコスモスやルーマニア・ダンスなどをよく弾いた。いかにもちふれたビアニストという感じだったが、しかし、どこかに昔の自由を残している感じがした。ある時、わたしがこれからハンガリーに行くのだといいたことから、彼は、わたしは亡命ハンガリー人だといひ、また、わたしは、ハンガリーの大作曲家、エルヌ（エルンスト＝ドイツ名）・フォン・ドホナーニにブダペストとアメリカで習ったことがあるのだというのであった。そしてそのドホナーニの孫が、いま、ドイツのフランクフルト歌劇場（以下フランクフルト）に就任しているが、歌劇歌手の練習指揮者をしているといった。

その後、わたしはハンガリーに行っても、エルンスト・フォン・ドホナーニの名を幾

クリストフ・フォン・ドホナーニのこと

● 園部 三郎



度も聞いたが、孫のことはすっかり忘れていた。そしてそれから10年ぐらいたち、パリとジュネーブで、非常に優秀な指揮者の老ビアニストと盆を共にするようになった。老ビアニストは、ラヴェルのソナチネやホルトークのミクロコスモスやルーマニア・ダンスなどをよく弾いた。いかにもちふれたビアニストという感じだったが、しかし、どこかに昔の自由を残している感じがした。ある時、わたしがこれからハンガリーに行くのだといいたことから、彼は、わたしは亡命ハンガリー人だといひ、また、わたしは、ハンガリーの大作曲家、エルヌ（エルンスト＝ドイツ名）・フォン・ドホナーニにブダペストとアメリカで習ったことがあるのだというのであった。そしてそのドホナーニの孫が、いま、ドイツのフランクフルト歌劇場（以下フランクフルト）に就任しているが、歌劇歌手の練習指揮者をしているといった。

その後、68年から69年に、西独のケルンで確かな音楽家の大編曲家さんと、三の外国人の紹介で、ドホナーニ氏とはほんの数分間話し合ったことがある。話し合うというよりも、あいさつというべき瞬間であった。

何もかも不確かなことばかりで恐縮だが、そのころの彼は、ケルンの歌劇場かケルン放送局交響楽団の指揮者であって、同時に根拠地はフランクフルト歌劇場のGMD（音楽総監督）にあったかと思う。だとすれば、ハンガリー出身の名指揮者ゲオルク・ショルティの後を継いだわけだ、当時まだ40歳ぐらいたったのに、その実力がどん

なに高く評価されていたかわたしには想像でしかたであった。

その後10年間の彼の活躍は、めざましかったようである。ドイツはもちろん、イタリアの都市、特にウィーンの国立歌劇場との関係は、きわめて近密だったようである。ところでその頃私はアニヤ・シリヤがドホナーニ氏の夫人であるというような噂を聞いていたが、そのシリヤ夫人も私にくつ

かの大きな感動を残している。例えは70年に、アニヤ・シリヤがR. シュトラウスの「サロメ」を導くというので、ウィーンに着いた翌々日早速国立歌劇場に出かけて行った。しかし、その時の指揮はホルスト・シュタインであった。ドホナーニ氏自身でなかったことは残念だったが、その時のシリヤ夫人の舞台は、さすがに当代第一のサロメ歌手だと思われた。

1970年以後のドホナーニ氏は、もはや第一級の指揮者として日本にもよく知られるようになっていた。しかも、彼のレパートリーの広さは、オペラとコンサート

にわたり、また、古典と現代の二つの様式にわたって独特の表現を示している。

わたしが聞いたオペラですばらしいと思ったのは、74年の秋、フランクフルト歌劇場で見た「フィガロ」における彼の指揮であった。そこには、プッチーニ・オペラ特有の軽妙さと、そして、モーツァルト独特の感性和様式がみごとに追求されていた記憶がある。私の印象では、カラヤンのような華麗な響きを求めるのではなく、むしろリアルな印象を求めている。私はこの点に彼が現代オペラの指揮に、熱情をもっている理由があると思えるのである。私は今でも、彼がベルリンで行なったベントウX若くは「模倣」の初演を見そこなったことを残念に思っているが、しかし1973年の5月ウィーンの国立歌劇場で聴いたシェンベルクの「モーゼとアロン」などに、特に先ほど述べたドホナーニ氏の特徴を読みとれたと思う。

このように、歌劇指揮者としての彼の活動が、ウィーン国立歌劇場やザルツブルグ音楽祭の重要なメンバーとして位置づけられ、さらにそれが、ウィーンの音楽活動とも深い関係をもったことは当然である。

私自身も、ウィーン「フェスト・ホッペン」を数回聞いたが、その中でもドホナーニ氏は重要な役割を果たしているはずである。ドホナーニ氏が、大指揮者ベームやカラヤンとは全く違った音楽性の持ち主であることはいうまでもない、そしてそれがどこのようなものであるかは、今夜の演奏から日本の好楽家の耳によって確められるわけである。

ともあれ、今年から、ホルスト・シュタインのあとを受けて、ハンブルク歌劇場の常任になるともきいている。今度の来日は、これからまさに頂点に向おうとする彼のようになっている。しかも、彼のレパートリー

現在欧米で評判の高いソプラノ、アニヤ・シリヤは、10年前日本でワグナーを歌ったそうである。「そうである」と記したのは、その頃私はその目で生活していたため、実状をよく知らないからである。

1967年、大阪国際フェスティバルは第10回記念公演としてバイロイト・ワグナー祭出演者の何人かを招き、ブーレーズ、シッパース、レンネルトらの指揮により、「トリスタンとイゾルデ」と「ワルキューレ」を大阪で合計8回上演したが、ウィーン・ガッセン、ニルソン、ホッター、アーダム、ニンシュエット、トーマスといったバイロイトの錚々たる常連に混ってアニヤ・シリヤの名前が見える。但し、これは偶然手詰にあつた予告記事に基いて得た知識だから、歌手の変更その他についての詳細は保証の限りでない。

詳細は保証の限りでないけれども、もしアニヤ・シリヤの舞台に接した方がおられたら、その方はきっと現在でも、彼女の張りあう美声と周囲を私う風姿が、つい昨日のこのように思い出されて、10年の歳月を決して長いとは思われない。私自身、ちょうど同じ年の夏、わざわざアメリカ合衆国の西海岸からバイロイトまで足をのび、彼女のプリュンヒルデを自分の耳と目で確かめたので実感である。

1960年、「さきまはオレンジ」のゼンタでバイロイトにデビューしたアニヤ・シリヤは、この時の大成功以来、例年バイロイト祝祭劇場の主要メンバーとなった。翌1961年にはもう彼女のゼンタによる「オレンジ」のレコードが発売された一事をもつて、彼女に対する人々の期待の度合いがうかがわれようというものである。

ウィーランド・ワグナーは特にアニヤ・シリヤの才能に着目し、積極的に彼女を起用したらしい。そのせいかどうか、そこまでは分らないけれども、ウィーランド

アニヤ・シリヤ雑感

● 中村 洪介



夏後、1967年を境にバイロイトのステージを去った彼女は、二度とワグナーを歌わないうろなど、まことにやがや噂も囁かれた位であった。無論この噂は真実でなく、例えは数年前にはミュンヘンで「タンホイザー」のエリーザベトを演じて大受好評を得たし、今回の来訪でイゾルデを歌うことも御承知の通り。

アニヤ・シリヤはベルリンの生まれ、両親は二人共俳優であった。8歳から歌の勉強を始め、10歳の年にベルリン、次いでハンブルクで演奏会を開いたとの由。ピアノやヴァイオリンならばまだしも、10歳で歌

の演奏会を開くとは余程の早熟ぶりと言えよう。演奏会とはいっても、いろいろ種類はあろうが、それでもドイツ歌曲による独唱会を催したのは15歳、ステージ・デビューは翌年ベルリン・シティ・オペラの「セビリアの理髪師」におけるロジータというから、矢張り少女時代から特別の資質を持っていたことだけは間違いないさうである。爾来ブラウンシュヴァイク国立劇場、シュトゥットガルト国立劇場、フランクフルト・アム・マイン歌劇場、更にエクス・アン・プロヴァンス音楽祭、ウィーン、ハンブルク、パリ各市の歌劇場への出演、その間

にバイロイトで活躍するなど、1950年代後半からこの20年間に、彼女は押しも押されぬ大歌手の地位を築き上げた。サン・フランシスコ、シカゴ、ニュー・ヨーク・メトロポリタンなど合衆国内の名門オペラ・ハウスも彼女を喜んで迎えた。

バイロイトで初めてアニヤ・シリヤを聴いた翌年から、私はヨーロッパに移り住むようになったが、当時、彼女はシュトゥットガルトのヴェルデンベルク国立劇場専属歌手であった。ここには、他に、グレース・ホフマン、マルタ・メーデル、グスタフ・ナイトリンガー、ヴォルフガング・ウィントガッセンも所属しており、客演にグリエンマー、ユリナツ、ニルソン、レスニック、リザネック、ゼーフリード、ワトソン、エーデルマン、ステューアートを招くといったふうに、ドイツ国内でも水準の高さをもって知られた劇場だった。私の滞欧1年目にはフェルディナント・ライトナーが音楽総監督であったが、次の年にはヴァツラフ・ノイマンに変わり、他の指揮者にクライバー、エレーダ、スメターチェク、ラインハルト・ベータースらを擁していた。アニヤ・シリヤがシュトゥットガルトの舞台を踏んで20年目に入った頃の頃である。

彼女はワグナーの役ばかりでなくサロメも、シェンベルクの「期待」、ルドルフ、"ヴォツェック"のマリメー、フィードリオも歌う。これも私がヨーロッパに移り住んで最初の年の暮、ウィーン国立歌劇場でベームの指揮の下に出演したルルは批評家の絶賛を浴びた。性格の強い、ひたむきに迫る激しい女性役が、歌の面でも動きの面でも彼女には最もふさわしい。アメリカで「ドイツのマリア・カラス」と異名を奉られていると言え、まだ彼女のオペラを見ていない人にも、おおよその想像がつくのではなからうか。

ウィーンはヨーロッパの東西そして南北をむすぶ交通の要地であり、国際政治や戦争や文化交流のはげしく渦巻く中心である。

フランス革命の余波がナポレオンの崩壊をよんでヨーロッパ全土に及び、ウィーンはフランス軍に占領され、女帝マリア・テレジアの愛好せるシェーンブルン宮殿がその司令部となる悲劇にも見舞われたが、ナポレオンの敗退後、1814年にヨーロッパ統治を話し合う列強のウィーン会議が開かれると、オーストリアの宰相メッテルニヒの下で反動体制の主導的な役割を演ずるようになった。続く神聖同盟の時代にはウィーンはヨーロッパの実質的な首府という親を呈した。

当時はオーケストラの演奏会といえば、たとえばベートーヴェンが新しい交響曲を発表するときのように、臨時編成のものでしかなかった。それでシンフォニー、オーケストラのために作曲するのは新しい時代をつくるのも同様な意味があった。交響曲はまさに新しい市民社会の音楽であって、ウィーンでは交響曲の演奏がまだアマチュアの手によるのみ委ねられていた。プロフェッショナル・オーケストラがこの分野に乗り出てくるのはフィルハーモニカの誕生を待たなければならなかったのである。

1833年、指揮者フランツ・ラハナーの発案で開かれた芸術家協会の学術演奏会、フィルハーモニカの歴史的な背景をなしている。

1842年3月28日、午後12時半、レッドツェンザールで、宮廷歌劇場管弦楽用の演奏会が初めて開かれた。それはウィーンの新新聞記者や音楽批評家、宮廷歌劇場の指揮者オットー・ニコライやシュナンツヒと弦楽四重奏用のヴァイオリン奏者カール・ホルツ、詩人ニコラウス・レーナウ、貴族や富商の市民などが集って計画したものであった。

それを予告するウィーン音楽新聞によると

ウィーンの歴史とフィルハーモニカ

●西村 弘治



「ウィーンの演奏会が押す押すの盛況にあるとき、あらゆる点で最高水準をめざす。いまひとつの演奏会が発足することによってお知らせするのは、編集者の喜びいつとめである。……宮廷歌劇場のオーケストラ全員がその指揮者オットー・ニコライ氏の指揮棒の下に、きかぬてアカデミックな演奏会をはじめ」ということであった。第1、そのプログラムはベートーヴェンの第7交響曲、モーツァルトの「劇場支配人」序曲、それにベートーヴェンとモーツァルトとケルビーニのオペラからのアリアなどで組まれていて、大成功をおさめた。その演奏会は年2回の開催が決められ、第2回からフィルハーモニカと銘打たれるようになった。

それが音楽愛好家たちの要望と相まって

宮廷歌劇場に所属するオーケストラ奏者たちの自主的な演奏会として誕生したことはまったく画期的なことである。それからフィルハーモニカの活動が楽員たちの自覚をはぐくんで、独自の民主的組織をつくっていったと見てよい。

次のようなニコライ宛ての手紙が残っている。「昨日、オーケストラの一員であるブランドシュテッカー氏が亡くなったことはすでににお聞き及びのことと存じます。長患いの果てのことで、ブランドシュテッカー氏の末亡人はいま夫の埋葬費用にもどこかあります。墓金も急場をしのぐだけでしかありません。そこで委員会のメンバーとオーケストラの全員とは、第4回演奏会の利益金をお渡しくださるようお願いしようとし合わせたのです」じっさい、

フィルハーモニカは不安定な生活を営む奏者たちの相互扶助に資するものとなって、経済的な問題のうえでもオーケストラの主体性を確立する基盤ができていった。それは最初から栄光につつまれて歩み出したのではない。しかしそこには市民社会における音楽の新しい在り方も見えている。その自立的活動がオーケストラの演奏を完成させるのにだけけプラスとなったか量り知れない。フィルハーモニカの稀有な自主独立の精神も、それに見合った自負心も、そうしたところで培われていったのである。

1848年、フランスの7月革命、とくに2月革命の影響を受けて、ウィーンでは労働者や学生などの決起から革命軍が占領し、メッテルニヒの失脚と、新しい憲法の発布を見た。しかしプラハの革命運動を鎮圧した大軍がウィーンに現れると、3週間にわたる市民の果敢な抵抗もむなしく、結局は反革命の勝利に終った。そしてフランツ・ヨーゼフが即位した。この優柔な古物もそれからいよいよ資本主義の波にあらわれ、1857年には古い城壁をこわしてリングと呼ばれる環状道路が設けられた。近代都市への変貌をきたした。

1860年、フィルハーモニカには飛躍のときがおとすれた。それから年4回であった定期演奏会が年8回にふやされた。その楽員総会は全員の投票で指揮者を選ぶことに決め、25歳のオットー・デノフを選出した。デノフは「現代の作品」をたびたび演奏したばかりか、「現代の作曲家」たちに指揮者として登場した。1875年からはハンズ・リヒターが23年間に243回の演奏会を指揮するという安定した強みを発揮して、フィルハーモニカはまさに黄金時代を迎えた。また、1870年以後、ウィーン楽友協



オットー・ニコライ (1810-1848)	カール・シュッケ (1820-1879)	オットー・デソフ (1835-1892)	グスタフ・ファマー (1860-1911)	フランツ・シャルク (1863-1931)	リヒャルト・シュトラウス (1864-1949)	ブルーノ・ワルター (1876-1962)	フリタス・フォン・ヴィンゲルター (1863-1942)
ウィルヘルム・グットヴェンゲラー (1886-1954)	クレメンス・クラウス (1893-1954)	ハンズ・リヒター (1888-1965)	ビエール・モントゥー (1875-1964)	カール・ベーム (1894-)	ヘルベルト・フォン・カラヤン (1908-)	ウィリー・ボスコフスキー (1909-)	レナード・バーンスタイン (1918-)

会館のムジックフェラインザールでその定期演奏会が開かれるようになった。

こうして19世紀末には今日あるウィナー・フィルハーモニカの民主的な組織と運営方法が完全にできあがっていたと見られる。それは外部にいさかかも頼らず、自分たちの音楽を純粋に保つ、自足的なものである。宮廷歌劇場のオーケストラ奏者たちが余暇を利用して演奏会を開くという他に類をない恵まれた条件の下でしかそれは成り立ちえないものであろうか。また、それに甘んじないで最高水準の演奏を約束したからこそ聴衆の永続的な支持を得られたにちがいない。しかも芸術家主体としてもっとも進歩した組織が芸術それ自体ではもっとも保守的な傾向をとるといふ大きな矛盾がある。それがまたいとも不思議な感動をもたらす原動力となっているのではあるまいか。

ウィナー・フィルハーモニカは熾熱したウィーン文化から生まれてきた。たとえば、同じ1842年に発足したニューヨーク・フィルハーモニカとは背後の文化が根本的にちがう。そのうえウィーンの特徴

は美術よりも演劇よりも音楽によく現れているからであるから、比較すべきものすらない。

ウィーンの宮廷歌劇場は15世紀の宮廷音楽にさかのぼる伝統を負うものであった。皇帝マキシミリアン一世は歌手としても器楽奏者としてもすぐれ、みずから「他のあらゆる音楽を凌駕する音の美しさ」という合唱隊と楽団をかかえていた。17世紀のウィーンはイタリアの音楽家たちによって大部分が占められていたけれども、音楽が都として開花した。30年戦争ののち帝位についたオーストリアは150あまりの歌曲を書きつけて、ウィーンで演奏されたオペラやオラトリオにはその一曲から数曲が挿入されるのが常であった。当時のウィーンはより卓越した音楽家たちの集まることと記述されていた。そのバロック期はカール四世のとき頂点に達した。フックス、コンディ、カルテラなどの手で、オペラ、オラトリオ、ミサ、器楽のための作品などが生み出され、バロック様式の荘重な威厳ある音楽が「そのようなのが全ヨーロッパのどこにも見られない」といわしめるま

でに発達していた。

そのようなウィーンのバロック精神はむしろグルックのオペラに永遠の生命の火をもしている。

1740年に即位したマリア・テレジアの時代は、音楽が繊細な妙なロココ様式へと大きく変っていった。それと同時に器楽が発達し、楽器そのものも機械的に向上して優美な表現が可能となった。近代世界の黎明が音楽にもおとすれたのである。ウィーンは絶対音楽の完成にもっとも大きく寄与するところとなった。ハイデン、モーツァルト、ベートーヴェン、そしてシューベルトが、ウィーン古典派の名で呼ばれ、近代音楽史に輝かしい金字塔をうちたてている。また、18世紀後半には宮廷の力が衰え、かわりに、貴族とならんで新興市民階級が音楽の担い手となったことも忘れられない。

19世紀前半、ウィーンの音楽は最高度の完成を見ており、それは他の都市のどんな時代にも追いつかないものである。フィルハーモニカは、そういう完成された音楽を現実の音として結晶化する使命をおびていた。19世紀後半、フィルハーモニカ

の活動を通して、ウィーン風という演奏の特色が定着していた。このオーケストラこそウィーンの特長である。当時の楽器や奏法から解釈まで、それにすぐるものは現在のフィルハーモニカにとってありえないのではなからうか。それで伝統を温存することが至上命令になったと考えられる。そのオーケストラ全員によって重要決定はあり、その内部から選んだ委員によって運営する。まさしく完全民主主義の組織が、いつしか閉鎖的に強固な団結を誇るようになった。それは指揮者の影響すらはのける。音楽そのものとして自己完結したものである。

そのまったく調和のとれた温かな音色。その振幅たる響。そのピッチとかバランスとかのよさは比較を絶する。もちろん、それは指揮者の手をはかりなくても保ちうる。しかし機械的な精密度とはいささかの関係もなく、そうしたフィルハーモニカの音はつねに人間のものの親和力を感じず。ペルリオーズはいった、「その情熱、その安定性、その比類ない演奏技巧などに加えて、このオーケストラの音色はじつに美し

い。それは一人一人の奏者のピッチが正しくても適切な音の出し方をしていないからだ」と。今日のフィルハーモニーがベルリオーズの幻想交響曲を演奏するとき、たとえばビエール・モントゥーの指揮によるレコーディングもまた、そんなことを逐一納得させないであろうか。その演奏はかりにもフランス的でないという理由でしりぞけられ、洗練の極に達している。それが解れないヴィーン風なのであるから、ベルリオーズもそのような演奏を聴いて、こうまで称えたのであろう。

「要するに、このオーケストラには、まじめな批評を拒むような思いがかった楽員はひとりもないし、各人と比べて自分を卑下するような者もない。また、自分の芸術家としての誇りをすてて、ペーターヴェンの名のために奉仕しているなどと考える者もないのだ」

1900年、ウィナー・フィルハーモニーはグスタフ・マーラーに率いられてバリの万国博覧会へ行き、国際的な名声をかせいだ。しかしまた、この強力偉大な指揮者とこのオーケストラがあつたべきをきたしたのであるから、もともと強固な演奏の流儀ができていたにちがいない。もとより、マーラーもこのオーケストラを模倣することは人後に落ちなかったのであるが。

20世紀に入って世の中の変化は大きく、保守的なヴィーンもそれを止めようがなかった。1840年に355,000であったヴィーンの人口は1910年には2,030,000と増大していった。工業において文化の香りが精巧な商品を生産しつつも、資本主義的な立ち渡りは否定できなかった。1914年、サラエヴォの銃声で始った第1次世界大戦は手痛い負けにさき終り、広大なオーストリア・ハンガリー帝国は解体され、ヴィーンは豊かな後背地を失うにいった。



豪華けんらんたる宮廷歌劇場も1918年には国立歌劇場と改められ、共和制国家の管理下におかれた。しかしフィルハーモニーはすこしも揺がず、ヴィーンの栄光に輝く音楽の第一の担い手となった。戦後の恐慌から経済的な窮乏に政治的な危機は深刻化し、世情騒然たる時代に、フィルハーモニーがフェリックス・ヴァインガルトナー、フランツ・シャルク、ヴィルヘルム・フルトヴェングラー、クレメンス・クラウス、ブルーノ・ウェルターという指揮者たちとやっていた演奏のすばらしさはいまでも語り継がれている。その一部はレコードとして残っているから、それを感動も新たに聴くことができる。

このオーケストラは現実の世界と歴史に対してさへ超然とした美の軌跡を獲得していたといえようか。

ウェルターは「そこには真の音楽文化が、変わらぬ地味な形態のなかで表現されて

いる」といい、「オーストリアの最高の演出品はウィナー・フィルハーモニーである」といった。事実、このオーケストラは国外の演奏旅行にしばしば出かけ、比類ないヴィーンの音楽を世界の人びとにもたらし続けている。また、1925年以来、それはザルツブルク音楽祭のオーケストラでもあって、世界中から観光客を誘致する絶大な魅力の源泉となっている。そこには無窮の、しかし無窮に豊かな、波めども波みつくせない富がある。

しかし、そのようなフィルハーモニーの活動が、国家公務員として国立歌劇場に勤務するかたわら、いわば楽員たちの余暇において続けられているということは、やはり不思議である。それも世俗的な利害関係から身をまわる音楽上の知恵なのであろうか。フルトヴェングラーが指揮者の名において復活した「ニコライ」演奏会は、楽員の未亡人救済や年金の一助にするため

今日まで存続している。こうしてフィルハーモニーは大きな時代の移り変わりや歳月の流れにもかわらず、初心を忘れず、地についた活動を続けてきているのである。

1938年、オーストリアはナチ・ドイツに併合された。第2次世界大戦後、ヒットラーの軀をかれ、再びヴィーンはオーストリアの首都となったが、アメリカ、イギリス、フランス、ソヴェトという4国管理の下におかれて冷戦の足踏で揺れ動いた。そして1955年に独立を回復してからは、ヴィーンは東西に分立した二つの世界の緩衝地帯となって今日にいたっている。

こうした現代においてウィナー・フィルハーモニーは遠い過去の音楽を甦らす、夢見のような演奏をする。もしも、それが時代錯誤であるなら、それ以上の美しい時代錯誤はないであろう。それこそ今日の世界におけるロマン的な音楽の在り方をもっとも雄弁に物語っているのではなからうか。

VIENNA PHILHARMONIC ORCHESTRA

ロンドンレコードのウィーン・フィルハーモニー来日記念特別企画



音楽の歴史をつくるウィーン・フィルハーモニー
それを記録するロンドンレコード



鋭い感性が新しい光を放つ!
ドボナーニ/メンデルスゾーン



(メンデルスゾーン)
交響曲第5番
《宗教改革》

交響曲第1番
クリストフ・ファン・ドボナーニ指揮
●SOL-1014・112・150



《ハルル》組曲 (ベルク)
楽劇《サロメ》 (R.シュトラウス)
—フィナーレ—何も聞かない

クリストフ・ファン・ドボナーニ指揮
●SOL-2447・172・300

ブルックナーが心に描いた理想の響き、それは、ウィーン・フィルのこの響きです。現代を代表する6人の指揮者が「自分の感性を信じ、名門のよき伝統と共に」に完成した...

ウィーン・フィルによる ブルックナー:交響曲全集

ショルティ=第7番・第8番 ●ベーム=第3番 (ワグナー)・第4番 (ロマンティック) ●マゼール=第5番
●メータ=第9番 ●シュタイン=第2番・第6番 ●ハード=第1番

●SOL-1014~26 (13枚組) ¥19,500



レコードアカデミー大賞に輝く
永遠のベスト・セラー盤!
(ブルックナー)
交響曲第4番
《ロマンティック》
カール・ベーム指揮
●SOL-1112・172・500



VIENNA PHILHARMONIC ORCHESTRA

ロンドンレコードのウィーン・フィルハーモニー来日記念特別企画

メータとウィーン・フィル
この新しい結びつきが創り出す新鮮な感動...

メータ・ブラムス 交響曲第1番

(メータ)
交響曲第2番
《復活》

ズービン・メータ指揮
●S.L.A-1011・¥2,500 (レコード5面/袖日新聞試聴券2枚付)

(ブクナー)
交響曲第9番二長調

ズービン・メータ指揮
●S.L.C-1840・¥2,500 (レコード5面/袖日新聞試聴券2枚付)



10人の大指揮者によるウィーン・フィル名盤中の名盤をこの超特価で!

ウィーン・フィル名盤1,300

交響曲第36番(リンツ)(モーツァルト)
ピアノ協奏曲第15番(モーツァルト)
●GT-9085

カラヤン・デックス!
グリーグ(ベルグ・ヴェント)より組曲「オー
セの死」/グリーグの組曲「ワグネルの歌」より
ワグネルの歌
ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮
●GT-9086

ハチャトゥリアン自作自演集
ハチャトゥリアン/バレエ組曲《スパ
タカス》
アラム・ハチャトゥリアン指揮
●GT-9087

クナッパーツブッシュ/
ワーグナー・オペラ「第1集」
交響曲「神々の黄昏」/夜明けとシークフリ
ートのライラの歌/シークフリートの前進
行進曲/交響曲「ワグネルの歌」より
ワグネルの歌
●GT-9088

クナッパーツブッシュ/
ワーグナー・オペラ「第2集」
交響曲「ワグネルの歌」第1集への前奏曲/ワ
グネルの歌/ワグネルの歌/ワグネルの歌
の夜明けとシークフリートの前進
●GT-9089

クナッパーツブッシュ/
ブラームス名演集
大管弦楽曲「パシフィック」の主題による交響曲
「パシフィック」/交響曲「パシフィック」
●GT-9090

各ステレオ30mmLP ¥1,300

交響曲第5番(ブルクナー)
ハンズ・クナッパーツブッシュ指揮
●GT-9091

クナッパーツブッシュ/ウィーンの休日
ラヴェル「夜曲」/アンセルメ・ホルカ・加
田「ワグネルの歌」/リッパ・トラッパ・ボ
ーグ・ウィーンの夜の物語/施
●GT-9092

クナッパーツブッシュの美しいコンサート
バレエ組曲「くるみ割り人形」(チャイコフ
スキー) / 車輪行進曲(シュベール) / 舞
臺の輪舞曲(ヴェーバー) / 交響曲「ワグ
ネルの歌」(ニコライ)
●GT-9093

交響曲第1番(ブラームス)
クラウス・エンゲル指揮
●GT-9094

交響曲第2番(ブラームス)
クラウス・エンゲル指揮
●GT-9095

交響曲第3番(ブラームス)
クラウス・エンゲル指揮
●GT-9096

交響曲第4番(ブラームス)
クラウス・エンゲル指揮
●GT-9097

交響曲第9番(新世界から)(リッパ・トラッ
パ) / 交響曲「ワグネルの歌」(ニコライ)
クラウス・エンゲル指揮
●GT-9098

交響曲第6番(モーツァルト)
ジャン・マルティン・ラモ指揮
●GT-9099

交響曲第6番(モーツァルト)
ジャン・マルティン・ラモ指揮
●GT-9100

幻想交響曲(ベルリオーズ)
ジャン・マルティン・ラモ指揮
●GT-9101

VIENNA PHILHARMONIC ORCHESTRA

ロンドンレコードのウィーン・フィルハーモニー来日記念特別企画

ショルティはウィーン・フィルから無限の力を引き出す...



ニルンベルクの マイスター・ジンガー

(ワグナー) 全曲

ノーマン・ベリオーズ / クラウス・エンゲル / ルネ・コロ / 他
サー・ゲオルグ・ショルティ指揮
●S.L.A-7015・7016(4枚組) ¥12,500

シューマン: 交響曲全集 (分売です)
サー・ゲオルグ・ショルティ指揮

交響曲第1番(春)/序曲、スケルツォと終曲

●S.L.A-6179・¥2,500

交響曲第2番/序曲(ジュリアス・シーザー)

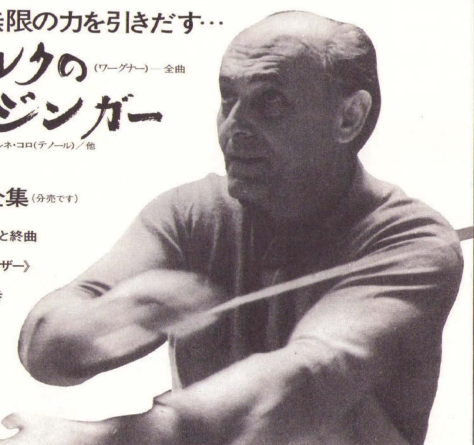
●S.L.A-6180・¥2,500

交響曲第3番(ライン)/交響曲第4番

●S.L.A-6181・¥2,500

ショルティ/ウィーン・フィルによるワーグナー
R.シュトラウス・オペラシリーズ好評発売中!

「ラインの黄金」●S.L.D-7085・71(3枚組) ¥4,800 / 「ワルキューレ」●S.L.D-7086・52
(5枚組) ¥11,500 / 「ジークフリート」●S.L.D-7093・71(5枚組) ¥11,500 / 「神々のたそ
がれ」●S.L.D-7098・71(5枚組) ¥12,800 / 「タンホイザー」●S.L.A-7558・61(4枚組)
¥10,000 / 「ワルジファル」●S.L.D-7186・80(5枚組) ¥11,500 / 「ザロム」●S.L.D-7183
・41(2枚組) ¥4,800 / 「ばらの騎士」●S.L.A-7525・30(4枚組) ¥10,000 / 「エレクトラ」
●S.L.A-7531・21(2枚組) ¥5,000



限定盤ですのでお早目に求め下さい。

《ロザムンデ》付帯音楽(シュベール)
(リッパ・トラッパ)
●GT-9102

《真夏の夜の夢》付帯音楽
ピエール・モンテュー指揮
●GT-9103

交響曲第7番(ベートーヴェン)
サー・ゲオルグ・ショルティ指揮
●GT-9104

ショルティ/スズン・名曲集
経験者、ウィーンの歌(1-12) / 詩人と恋人 /
スズン・名曲集
●GT-9105

交響曲第35番(ワグナー)(モーツァルト)
交響曲第8番(未完成)(シューベール)
カール・シューリヒト指揮
●GT-9106

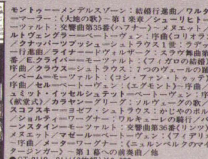
交響曲第3番(モーツァルト)
サー・ゲオルグ・ショルティ指揮
●GT-9107

今度のウィーン・フィルの来日を機に遂に実現した夢の企画!
20人の偉大な指揮者の個性を通してウィーン・フィルの歩みと
魅力のすべてが聴き出される、いわば「ウィーン・フィル・サンブラー」
ウィーン・フィルと20人の偉大な指揮者たち

VIENNA PHILHARMONIC
20 GREAT CONDUCTORS

モントゥー・カール・シューリヒト / 経験者、ウィーンの歌 / 「ワグネルの歌」
「ワグネルの歌」第1集 / 「ワグネルの歌」第2集 / 「ワグネルの歌」第3集 / 「ワグネルの歌」第4集 / 「ワグネルの歌」第5集 / 「ワグネルの歌」第6集 / 「ワグネルの歌」第7集 / 「ワグネルの歌」第8集 / 「ワグネルの歌」第9集 / 「ワグネルの歌」第10集 / 「ワグネルの歌」第11集 / 「ワグネルの歌」第12集 / 「ワグネルの歌」第13集 / 「ワグネルの歌」第14集 / 「ワグネルの歌」第15集 / 「ワグネルの歌」第16集 / 「ワグネルの歌」第17集 / 「ワグネルの歌」第18集 / 「ワグネルの歌」第19集 / 「ワグネルの歌」第20集

●GT-9108・9111(2枚組) ¥2,000



音楽の歴史をつくるウィーン・フィルハーモニー
それを記録するロンドンレコード



音楽の歴史をつくるウィーン・フィルハーモニー
それを記録するロンドンレコード

はじめてヴィーン・フィルをナマで聞いたのはヒンデミットの指揮の下に比較的小編成で来日した時のことで、あれからもう20年あまりになる。

しかし、あの時のメンデルスゾーンの変奏曲「イタリア」の演奏ぶりをたたくしはなかなかおぼれることはできない。いや、一生忘れることはないだろう。木管の純正なハーモニもさることながら、古典のシンフォニーはこういうふしでやるのだという基準をはっきりと示した演奏であると思う。シンフォニーの骨格を組み立てていくのに、オーケストラの各部分かどのように機能するかということ、さびけない演奏ぶりによってあらわにはっきりとわかされてくれるオーケストラが他に多くは思えない。

それは結局の所、シンフォニーが誕生し、完成したのはウィーンにおいてであり、シンフォニーというものは音楽におけるウィーン語で書かれているのであり、その唯一の正統な使い手であるウィーン・フィルがシンフォニーをもっとも正統的に物語ることでできるからにはほかならない。

もちろん、音楽は古典派・ロマン派のシンフォニーだけではない。フランスのオペラがあり、ロシアのバレエがあり、その他さまざまである。だが、こと古典派・ロマン派のシンフォニーにかなする限り、ウィーン・フィル以上に純正なシンフォニー語を話すオーケストラはある筈がない。

初来日の2、3年あとにフル編成でカラヤンと来日した時のブルックナーの第8がまたすごかった。あの力と輝きと豊かな響きは、これまたヴィーン・フィルならではの特質だ。あのホルン属の楽器のヴァーン特有の構造と音色が、オーストリア人ブルックナーの音楽にはうってつけであるし、精鋭揃いでしかも大人数の弦の表現力がブルックナーやマーラーでは大きな「物」をいう

しかし、われわれは常日頃ヴィーン・フ

ヴィーン・フィル替

●柴田 南雄

[illegible]

イルのナマがける訳は少なからず、どうしてもレコードの印象も少なからざる比重を占めることになる。昔のSPレコード時代に至りては、ヴァイカルトナーの指揮によるベートヴェンの「エロイカ」第7、第8、第9、そしてワグネルによる第6やモーツァルの「ジュビター」などによってヴァン・フィルのすばらしさをわれわれは堪能したものであった。これにワグネルによる「ラーナー」の「大地の歌」と第13号晩年のヴァン・フィルの演奏の「ライラ」であった。それらの演奏ではオーボエとホルンと弦の音色が色あざより、その他はオケストラ直前に区別できない。その法則は

の細かいキザミとか、フルートの低音域とか、そういう細部がよく磨き上げられているのにも感心するが、何より、ワルターの頃とはまったく変ってしまった今日の感覚、現代の演奏様式をこの歴史の古いウィーン・フィルは完全に手に入れてしまっていることだ。

そのときには「春の祭典」にもよくあわれてゐる。あの演では、前に指揮したウィーン特約のオーボエ奏者エーダ・ヒューゲの特色と、得意の野性味とでも効果的に利用してゐた。しかし、最近の録音の中で注目し置けるのは、カルロス・クライバーによるベートーヴェンの第7であらう。クライバーの演出は、マーク以上に、ウィーン・フィルの楽員音楽趣味とこのキックが、おそらく大きいであらう。もとと「オーボエ・デュオ」なベートーヴェンを倒さない人にもなるだろう。だがあのレコードはさすがにクライバーの意図を正確に受け生かした演出になつてゐる。大成功の後の響の中心から、本音響のハーモニーが明確に浮び上つて来たり、スコアにちゃんとあるのに、ふだんは聞きとれない音高はこれと一致し照らしあはせ、それこそ指揮者の意図であるにせよ、ウー

目に尾をひいていると思う。

最近のレコードでのウー

取过 20 = 1 (100%)

名演は枚挙にいとまない。我

的な好みが入るけれども、ま

揮のマーラーの第2がめざ。

る おそらく ヴィーン・フ

今日が、かならずしも苦しい。

主員が、かならずしも右の

しい音楽に共感してはいない

と伝統的で温かなマラーの

というプレーヤーも当然いる

オーケストラとはそういう

(1) 1. 涼春の杜川はさ

しかし、演奏の和声はオー

がじつにメータに敏感に反応

玉となって突進している。

ン・フィルならばこそ実現できたようなことかと推測がある。ヴィーン・フィルはこんなに若々しく、みずみずしい感覚のオーケストラだったのか、と改めて驚いたのであった。このような、オーケストラ表現における真の今日的感覚をヴィーン・フィルはいつの間にか身につけたのであろうか。もしくは、と、ほんのここ数年のことであるかも知れない。

もっとも伝統的であると共に、もっとも今日のでもあるヴィーン・フィル。それをナマ演奏で確かめられるのは大きな楽しみだ。

カラヤン指揮の
ウィーン・フィルは
こんなにも優美で
潑刺としています

●各30cmモノーラル
¥1,300
ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮
ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団



- [illegible]

《回想のロンド》という本がある。カール・ベームの回想録である。音楽家の回想録は幾冊か読んだ事があるが、カザルスとは異に、ベームは永く私の記憶に留まるものであろう。ベームの場合、ハンス・ヴァイゲルという人物が、ベームの談話に注意深く取材し、12の半音階音を一歩一歩通って行くように、珠玉のような光彩をもった12の章にまとめ上げたものなのである。そして、その中の何行か、何頁かでは、私も目撃者の一人であり、証人として名乗りを上げられる事案についてふれてある。

ベームの生演奏に初めて私が聴いたのは、1955年、ウィーン国立歌劇場再建記念公演の折であった。その事は回想録の第10章で触れられているが、特に《ヴォツェック》は忘れられない上演であった。その後、いろいろなオペラを観たが、最後に幕が下りてからも、客席に釘付けにされたように動けなくなって、感動の涙にむせんだというような観劇の体験は、二度と私はよみがえっては来なかった。《ドン・ジョヴァンニ》もショッキングであった。ロマン的な劇的表現の効果を音楽で慄然とするほどに感ぜさせられたのは、私にとって初めての経験だったのである。ベームはその回想の中で「ヴァーグナー自身もあるとき、自分のいろいろな楽劇の誕生は究極的には《ドン・ジョヴァンニ》の騎士長の出で来る情景に負っている」と告白している」と述べている。モーツァルトが同時にヴァグネリアンであり得るかどうかにについて語っているところにおいて（第11章）だが、この《ヴォツェック》と《ドン・ジョヴァンニ》が、ともに新演出だったことが記録されているのを読んで、感慨を新たにしたい。

ニューヨークのメトで1971年の一月だったかに親た夢のように美しい（ぼろの）も、ベームの指揮だった。彼が指揮台に向って歩み始めた途端から轟然と拍手が湧き

ベームと、ウィーン・フィルと……。

●諸井 誠

起って、まるで公演終了後のアンコールのように、15分以上も鳴り止まなかった光景が今でも忘れられない。そして東京での《フィデリオ》、ベルリン・ドイツ・オペラの日生劇場こけら落し公演の折だった。回想録は、この傑作がベームにとって「宿命のオペラ」であったことを伝えているが、私にとってもそれは忘れられない音楽体験の一つとなった。

こうしてベームにまつわる自分の体験の

記憶をよび起していると、幸なことにその強烈な印象の大部分がオペラと結びついている事に気付く。《回想のロンド》のほとんど99パーセントは、オペラにかかわりのある事象で占められているが、ベームがいかにオペラを愛し、それに情熱を打込んでいたかをそれが物語っているといえよう。

モーツァルト、R. シュトラウス、ヴァーグナー、ベルク、ブルクナー、ベートーヴェン等が、ベームの口から回想録の中

でしばしば語られている名前である。ブルクナーについては、第4交響曲《ロマンティック》のレコードでだけ私はベームの演奏に接している。何と素晴らしいレコードだろうか。レコードは芸術ではない、などと主張する人々に、私は反論したい。世界最高の指揮者と伝統に輝くオーケストラとの完全な結び付きと、そしてレコーディングに深い関心と愛情をもつ人々の協力と努力があって、このような見事な「芸術品」をのこしてくれない筈はないのである。ベルクの《ヴォツェック》と《ルル》も、私には貴重なレコードだ。それらを時々き返しながら、私は「芸術的成功に關係しているなかの一人が全体のプランのなかを身を投じたからといって、彼の功績が軽蔑されたことに決してならない。なぜといって最も重要なものは作曲家の意志であり、また公演に上った作品であるし、今後もそうである」という言葉を何時も思い出す。そこは指揮者ベームの真骨頂がにじみ出ているからである。

ウィーン・フィルについても彼の言葉を借りて語るのが最も正鵠を射た方法だと思う——「その均質性と多面性で無敵なこのオーケストラの、そしてなによりも同時に優秀な演奏会オーケストラと優秀な劇場オーケストラでありうるといって、世界でもユニークなその特異性の長所『ウィーン』児ばかりである団員たちはたんに外面的にだけでなく、音楽的にも同一の言語を話す」。

ベームとウィーン・フィルという絶妙なコンビを、もしかすると二度とく事が出来なかも知れないわかれは、かけがえのない音楽体験を、今回の来日で与えられるにちがいないのだ。私のベームとウィーン・フィル体験に貴重な一頁が加わる日がやがてくる。

カール・ベームが最初に来日したのは、1963年10月、ベルリン・ドイツ・オペラの一員としてだった。一方、ウィーン・フィルハーモニーは、1956年4月に初来日し、ヒンデミットの指揮で演奏会を行ったが、その時の編成は正典のものでなかったもので、やはりウィーン・フィルハーモニーの初来日は、1959年10月と考えるべきだろう。その時、ウィーン・フィルハーモニーは、カラヤンと共にやっていた。

ベームの初来日にしろ、ウィーン・フィルハーモニーの初来日にしろ、今となつては、昔のことだ。記録を調べないと、その正確な時期を思い出すのさえおぼつかないほどの、遠い日のことだ。

それから今日まで、わずかとはいいがたい期間が経過した。そして、当然、さまざまなものが、変化した。ベームをとりまく、あるいはウィーン・フィルハーモニーをとりまく、少しおかげさには状況も、例外ではなかった。その間の時間の経過は、ベームを長老指揮者の地位につかせ、ウィーン・フィルハーモニーの、たとえばベルリン・フィルハーモニーのそれとはあきらかにちがう、ウィーン・フィルハーモニーならではの特質を、くっきりとかきあがらせたのかもしれない。

もし、ヨーロッパ音楽界に、「佳き時代」と呼べる時代があったとすれば、それを懐かしむ、あるいは憧れる人にとって、ベームも、ウィーン・フィルハーモニーも、かけがえのない宝がたりえていたようだ。むしろだからといって、ベームやウィーン・フィルハーモニーが寄産品化したといいたいのではない。ベームにしろ、ウィーン・フィルハーモニーにしろ、いまなおいきいきと音楽活動をつづけている音楽体だ。

ただ、たとえばカルロス・クライバーによって指揮されたウィーン・フィルハーモニーの演奏になじめない人でも、ベームと

ひとつの引力

●黒田 恭一



ウィーン・フィルハーモニーの演奏にならずけられるのかもしれない。その時その人は、多分、ヨーロッパ音楽界が多分の時間をかけてつくりあげた結晶がなつ引力にひっぱられているにちがいない。そしてそれは、おそらく、その無意識のうちに感じている引力が、やがては消え去ると予感していること。

すくなくとも、ベルリン・ドイツ・オペラと来日して「フィデリオ」なり「フィガロの結婚」なりを指揮するベームをきいている時には、そしてカラヤンと共にやってくるブルクナーのシンフォニーを演奏しているウィーン・フィルハーモニーをきいている時には、そいういふ予感、感じられなかった。だから、当時の、ベームへの、そしてウィーン・フィルハーモニーへのききての執着は、あきらかに、今日のそれとはちがっていた。

どこで、なにが、どのように、かわったのか。それを考えるとは、必然的に、ベームとウィーン・フィルハーモニーという、ヨーロッパ音楽界がおのれの誇りとてまづ最初に提示すべきひとつのユニットがなつ引力のなんたるかを考えることになるだろう。そしてそのことは同時に、あふりだし風に、この偉大なききての西洋音楽への対し方、ふるまい方、あるいは反応のしかたの一面を、あきらかにするのかもしれない。

「ベームとウィーン・フィルハーモニー」という言葉が、ひとつの引力として作用していることは、おそらく否定できない。むしろその引力をよききすることはできる。磁石を前にされた鉄屑のように反応することもできる。引力の存在が必然たる事実だとすれば、なんらかの反応がそこに生じて不思議はなく、反応がつまり、おのれの音楽を語ることになるだろう。

クレンペラーのように80歳を超えてから、いよいよ成長していった例外はあるにしても、一般に指揮者の全盛期は70代とみて良いのではあるまいか。60代では熟し切れず、80代に入ると今度は熟すぎて弛緩が始まってしまう(従ってフルトヴェングラーの他界は明らかに早すぎた)。

ベームは現在82歳であるから、もはや最後の光芒を示す時となった。S Pレコードに聴く1930年代から40年代にかけての若き日の彼は、あまりにも凝縮しすぎた表現によってスケールを小さくする嫌いかあり、やはり彼の場合も1960年代を絶頂期とすべきではないだろうか。

しかし、それより前の1950年代のベームもよくは大好きだ。彼の中で造型は少しづつ大きさを増してゆき、それに伴って内容も徐々に眼れ上ってゆく。しかもそのバランスが常に安定を保っているとはいえず、時には内容の膨張が激しすぎて造型を崩してしまふ場合がある。たとえば1950年のウィーン音楽祭の実況盤に聴くモーツァルトの「ジュピター」や「アイネ・クライネ

ベーム＝ウィーン・フィルの聴きどころ

●宇野 功芳

がそんな危険な芸術の姿を示す好例であった。前者の第1楽章など、おどろくほど遅いテンポで開始されるが、次第に普通のスピードに戻っていくのが、再演前の第1テープには提示音がうそのように速く、ソナタ形式の論理から言うところには許せない害であるが、音楽の本場でモーツァルトを得意とする指揮者やオーケストラが、こんな演奏をしていること自体、すごく面白いと思う。

はくか初めてベームの生を聴いたのは、1964年にベルリン・ドイツ・オペラを串いで来日したときで、「フィガロ」も「フィデリオ」も、まさに絶頂期のベームを伝えていた。しかしベームといえば何といってもウィーン・フィルだ。その表現に微笑みが不足し、厳しすぎるために純ドイッチ風」といわれる彼の演奏であるが、ベームは決してドイツ人ではない。オーストリア人なの

である。従ってペルリン・フィルよりは段々ウィーン・フィルの方が相性が良い」というように、ペルリンの場合にはペーヴの厳しさが前面に出すぎてしまう、という方向で正解かも知れない。ウィーンでもペーヴを悪鬼のように描いた。戦後ウィーン国立歌劇場が再建された最も大切な時期に総監督の地位をあたえた、最も近年は久し振りにウィーン・フィルの常任指揮者の地位を提供するなど、抜擢の意図が利用できる。しかし周知したところの嫌いなペーヴが、前者の場合は暗喩してやめてほしい、後者の場合もあらず経路するまで、彼のファンにとっては考えられない事象であるのはほまことに残念でたまらない。まあ、そこがペーヴの良さと可能であり、それだからこそ、ある演奏家とこうだといえるのであるが、

ウィーン・フィルは色気に乏しいベームの表現をそのチャーミングな音色で彩り、

外面を飾り立てる。一見水と油のような両者だが、そこに何の違和感も無く、まさに絶妙のコンビとなるのである。

80歳を超えたベームには、もはや勇み足は見られない。それゆゑのフアンにはやがて物足りない点でもあるわけだが、その代り巨大な建築を仰ぎ見るような立派さがある。彼は今や音楽自体に完全に寄りかかり、その細部をがしりと格上らせることによつて、ベートーヴェン自身、ブラームス自身に語りかける。それゆゑ、現在の彼は第一流の作品しか振れないであらうし、第一流の作品でも調子で悪いとは、外面ばかりか巨大で、内容の緊迫感に欠けるマニエラを見せ得る。

だが、今回の来日公演における「エロイカ」は彼のファンが待ちに待ったものであり、名演を切に期待したい。また東京文化会館や大阪フェスティバルのプロはホールの良さによって、彼の真価を初めて伝え得るものになるであろう。全盛期の迫力に代る夕映えの寂しさ、それこそ当夜のプログラムの最大の聴きどころかも知れない。

ONKYO®

オンキヨーは音楽のもつ芸術性をオーディオの場で
再現しようと努力を傾けているオーディオの専門メーカーです。

音楽の感動と興奮を

リアリスティックに再現します。

新しいIntegnaとM-6。

音楽には音楽のたのしさ、聞く喜びというものがあります。これをオーディオの場でどう再現するか——私たちはその決め手を、音楽のファンダメンタル帯域・中低域再生における秀れた立上りと適確な定位感から生み出されるリズム感であり、パワー感であると考えています。新しいIntegraアンプとスピーカM-6は再生音楽の名コンダクターです。

新製品 Integra T-7 (FM専用チューナ) ¥55,000

●タウツロツク搭載●実用感度1.7μV(9.8dB)
●S/N比●歪率0.009%(Stereo-WIDE)●選択度2段
切換●エアチェックキャリブレーション●44W×
15ch×310Dm●7.0kg

新製品 Integra A-7 (プリメインアンプ) ¥73,000

● 定格出力60W・60W(20~20kHz・8Ω) ● 全高調波歪率0.05%以下(定格出力時) ● PHONO S/N比80dB以上 ● PHONO最大入力230mV・RMS 1kHz ● 444W×159H×380Dmm ● 13.5kg

M-6 (スピーカ)	¥52,000 (日本)
------------	--------------

●2ウェイバスレス型●最大入力 100W●音圧レベル95dB/w/m●寸法392W×680D×375Dmm●重量23kg

CP-700M (プレーヤー)	¥41,800
-----------------	---------

●OD方式マニュアルプレーヤー●1.6kgアルミダイカ
スケーターテーブル●MM型カートリッジ●寸法
452W×174H×374Dmm●重量10.5kg



ウィーン・フィルの演奏が現在比較的手しやすいコードは、ワインガルトナーが予約演奏会に就任した以後のものである。年代別にいうと、1920年代以降のもの、とくに1930年代の後半以後のものである。しかも、それからのレコードの数はきわめて多い。指揮者も多種多様である。名盤とされるものも、実際には枚挙のいとまがないほどである。そのなかから、ウィーン・フィルの特徴がとくにはっきりしているレコードを、いくつかあげておこう。

ワインガルトナー指揮のベートーヴェンの交響曲第8番(エンジェル)。第9番もあるが、第8番は典型にすぎるとままとあげられていながら、いかにもウィーン・フィルらしいふくよかな表情をおく。ワインガルトナーのベートーヴェンというのは、きわめて高く評価されていたのだが、それがこのレコードからも実証されるような感じである。

フルトヴェングラー指揮のベートーヴェンの交響曲第8番(エンジェル)(エンジェル)堂々とした貫貫をみせた演奏だが、フルトヴェングラーの独特な音楽づくりの要求にオーケストラがうまく応じているし、オーケストラに驚きがない。

フルトヴェングラー指揮のワーグナーの《ワルキューレ》全曲(エンジェル)歌手陣も揃っているが、なにより指揮者とオーケストラの緊密な結びつきがすばらしい。ワーグナーの魔力のとりこになるには絶好のレコードといえるべきだろう。

クレメンス・クラウス指揮のシュトラウスのワルツとポルカ集(ロンドン)ウィーンの名匠ウィーン・フィルの古い楽員も、シュトラウスの作品ではクレメンス・クラウスの指揮をいまでも懐かしがっている。ウィーン・フィルのいゆるシュトラウス伝統に大きく寄与したのがこのクラウスなのである。ワルツのリズムのとおり、メロ

ウィーン・フィルの名盤

●門馬 直美



クラウディオ・アバド指揮ウィーン・フィル

ディーのしなやかな表情などは、他のレコードに求められないものになっている。曲目も、なじみ深いものを取りながらも、なかなか多彩である。

ワルター指揮のモーツァルトの交響曲第40番ト短調(CBSソニー)演奏会の録音で、現在ではほとんど接することができないような表現があったりするが、レコードによるウィーン・フィルの歴史を語るるとすれば、これは欠かせないものである。その音楽的なめづりごととふくよかさは、まさにワルターであり、ウィーン・フィルである。

シュリーヒト指揮のブルックナーの交響曲第8番(エンジェル)これも、この曲の名盤といわれるレコード。シュリーヒトは、日本ではそれほどなじみ深い存在ではなかったが、ドイツの若くは成力点で絶対的な実力をもっている。

ベーム指揮のベートーヴェン交響曲全集(グラモフォン)まことに人念な演奏であ

る。ベームは、ウィーン・フィルの歴史によって培われたものを尊重し、それをプラスの方面に作用させ、しかも奇をてらわずに、正統的なベートーヴェンをつくりあげている。個々の曲にふれるゆりではないが、比較的好めめのテンポながら、緊張感をおいていて、しかも高い品格もおく。

ベーム指揮のブラームス交響曲全集(グラモフォン)このアルバムも、前記のベートーヴェンの交響曲全集と同傾向のものだが、ブラームスのロマン性を強く打ちだし、ウィーン・フィルがベームという指揮者をいかに信頼しているかがうかがえ、と同時に、ベームがメンバーの自発性を巧みに引きだしているの、指揮者とオーケストラとの間には、インティマな情感が流れている。なお、ベーム＝ウィーン・フィルのレコードには、モーツァルトにもすばらしいものがある(グラモフォン)。

ベームその他によるブルックナー交響曲

全集(ロンドン)これは、アマード、シュタイン、ベーム、マゼール、ショルティ、メータという6人の指揮者がそれぞれ1曲あるいは2曲を指揮したものをまとめた全9曲のアルバムである。指揮者の個性がうかがえる点で興味があるが、またどの曲にもウィーン・フィルの味というもの共通しているのが面白い。ウィーン・フィルがいかに自分の音質と信念を頑固に守るかを示すアルバムでもある。しかし、ブルックナー愛好者にとっても、貴重なアルバムが出現したというべきだろう。

ショルティ指揮のワーグナーの《ニーベルングの指環》(ロンドン)全4作をはじめてスタジオ録音で完成したレコードである。この大作で、ショルティは、きめの細かい指揮ぶりを見せたが、ウィーン・フィルが戦線一貫してきちんとした演奏をしているのも特筆されるべきだろう。これは、ウィーン・フィルの多面性をきわめてよく示す演奏になっている。

シュタイン指揮のベートーヴェンのピアノ協奏曲全5曲(ロンドン)ピアノはグルタである。このピアノもききこえることから、ウィーン・フィルの演奏だけに話をしよるとすると、このオーケストラが協奏曲の場合にも、やはり超第一級の水準を保っていることをここで強調しなければならぬだろう。それは、たしかにシュタインの指揮によるところが大きいには違いないが、またウィーン・フィルの老練さと楽員の自主性にも関係している。このレコードの成功の大きな一因は、ウィーン・フィルがオーケストラを担当したことである。

メータ指揮のマーラーの交響曲第2番(復活)(ロンドン)美感を存分にたよせられた演奏になっている。この美感やきめの細かさ、やはりウィーン・フィルに負うところが大きいといわなければならない。

まさしく伝統の響き、ウィーンの名。

ウィーン・フィルの首席奏者達によるアンサンブルの妙、モーツァルト室内楽の極めつけ

TRIO RECORDS
発売元・トリオ株式会社



ウィーンの名、最上級の、選ばれた音楽家、技心を傾けたモーツァルト。伝統にちかわれたものだけが持つ、深く、重い味わい。室内楽の楽しさが満喫できるシリーズです。

ウィーン室内奏団 全5枚/各¥1,800/録音:若林敬介

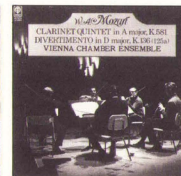
2月25日発売



モーツァルト
アイネクライネナハトムジーク

●モーツァルト:モーツァルト13番 ト長調「アイネクライネナハトムジーク」第2楽章、136小節、1981年録音、全5枚、各¥1,800

アルフレッド・ブーリッパ(フルート)/ウィリアム・ヒューブナー(第2ヴァイオリン)/ルドルフ・シュトルツ(第1ヴァイオリン)/パウル・ワースト(第2ヴァイオリン)/ロベルト・シャイバイン(チェロ)/ブルクハルト・クロイター(コントラバス)



モーツァルト
クラリネット五重奏曲

●モーツァルト:クラリネット五重奏曲 長調「アイネクライネナハトムジーク」第2楽章、136小節、1981年録音、全5枚、各¥1,800

アルフレッド・ブーリッパ(フルート)/ウィリアム・ヒューブナー(第2ヴァイオリン)/ルドルフ・シュトルツ(第1ヴァイオリン)/パウル・ワースト(第2ヴァイオリン)/ロベルト・シャイバイン(チェロ)/ブルクハルト・クロイター(コントラバス)



モーツァルト
弦楽四重奏曲第19番

●モーツァルト:弦楽四重奏曲第19番 長調「アイネクライネナハトムジーク」第2楽章、136小節、1981年録音、全5枚、各¥1,800

アルフレッド・ブーリッパ(フルート)/ウィリアム・ヒューブナー(第2ヴァイオリン)/ルドルフ・シュトルツ(第1ヴァイオリン)/パウル・ワースト(第2ヴァイオリン)/ロベルト・シャイバイン(チェロ)/ブルクハルト・クロイター(コントラバス)



モーツァルト
弦楽四重奏曲第14番

●モーツァルト:弦楽四重奏曲第14番 ト長調「アイネクライネナハトムジーク」第2楽章、136小節、1981年録音、全5枚、各¥1,800

アルフレッド・ブーリッパ(フルート)/ウィリアム・ヒューブナー(第2ヴァイオリン)/ルドルフ・シュトルツ(第1ヴァイオリン)/パウル・ワースト(第2ヴァイオリン)/ロベルト・シャイバイン(チェロ)/ブルクハルト・クロイター(コントラバス)



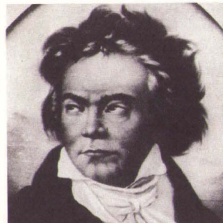
モーツァルト
弦楽四重奏曲第14番・第19番

●モーツァルト:弦楽四重奏曲第14番 ト長調「アイネクライネナハトムジーク」第2楽章、136小節、1981年録音、全5枚、各¥1,800

アルフレッド・ブーリッパ(フルート)/ウィリアム・ヒューブナー(第2ヴァイオリン)/ルドルフ・シュトルツ(第1ヴァイオリン)/パウル・ワースト(第2ヴァイオリン)/ロベルト・シャイバイン(チェロ)/ブルクハルト・クロイター(コントラバス)

★オーストリア・モーツァルト協会主催フレーテンワール重奏賞アルバム

【ベートーヴェン】



交響曲 第2番 二長調 作品36

ベートーヴェンの交響曲の中では、少なくともこれまでの日本ではあまり人気のある方には属してはいませんが、音楽的には充実した作品であり、指揮者のヨゼフ・クリップスのように「真の意味でのベートーヴェンの最初の交響曲で、彼の音楽的独立の宣言である」と言う人もいます。有名な「ハイゲンシュタットの遺書」を書いた1802年の作品だが、この曲には当時ベートーヴェンが精神的にも肉体的にも到底の状態にあったその苦悩の一片たりとも表われてはらず、健康的な明るさや幸福感にあふれている。これはロマン・ロランの言うように「この曲に幸福と愛への希望を打ち込んだ」のかも知れないし、ペルリオーズも「この交響曲に含まれているものは何もかも寛びく、すべてが高尚で活力があり、壮麗である」と評している。

第1交響曲が未だ古典的な様式から脱し得ない華麗な味わいがあるのに対して、この交響曲はその後の中期の全盛時代にみられるような、ベートーヴェン特有の充分に熟慮された劇的な要素をすていに見せ始めている。ことにそのこは、雄大な力強さと表現の豊かな変化をもっている第1楽章と

第4楽章にみられるが、中間の2つの楽章も大きな特色をもっている。すなわち第2楽章は、美しい抒情的な旋律に支配されている故に魅惑的であり、平和と懐かしにみちみちたような音楽を作り出している。また第3楽章は、交響曲史上初めてスケルツォが用いられたことも特筆すべきもので、メヌエットよりも速いテンポによるダイナミックな音楽の展開がベートーヴェンの音楽の独自の性格を生み出すのに効果を与えている。

因みにこの交響曲は、ベートーヴェン時代のフランスではもともと人気のあった曲で、いばば多く演奏されていたという。

交響曲 第3番 変ホ長調 作品55
「英雄」

この交響曲は、ベートーヴェンの9曲の交響曲のうち、声楽付の特別の作品である第9番を除けば、もっとも長大な作品である。それ以前の古典派の交響曲だったら悠に2曲は演奏できる長さである。そのこととはベートーヴェン自身も十分に承知しており、「この曲が長大なのはそれ相当の理由があるからで、演奏にあたってはなるべく聴衆が痺れていない、演奏会の最初の方で演奏されることが望ましい」という注釈をつけている。しかしそれにもかかわらず、当初はさんざん不評を買った。しかもそのおもな理由が「一曲の交響曲としてはあまりにも長すぎる」というようなものであったのは皮肉である。

長大な曲になったおもな理由として、各楽章の形式の充実にによる拡大化と、複雑化・自由化という点が指摘できよう。第1楽章のソナタ形式では、主題提示部が充実して長くなったのに加えて、展開部の発展がより入念になり、しかもここにさらに新しい動機を加えているために、展開部の提示

部の2倍近い長さに拡大されている。また第2楽章の葬送行進曲でも、一応トリオ部をもつ三部形式をとっているが、トリオ部の途中に主部の主旋律を出したり、そのあとに主部の副旋律の転回形による対位法的な展開を入れるなどして、非常に自由な形になっている。しかも各部分に経過句的な結尾の旋律を加えるなどしており、そのために逆に楽章全体は音楽的に緊密なまとまりをもつ充実したものになっている。

この複雑化と自由化の傾向は、第4楽章にもいっそう明確な形で現われている。ここでは変奏形式を用いているが、その主題は2つあって、しかもそれらは1つの象徴的低声部と高声部とを別けて使ったものである。そしてその主題はそれぞれ別々に変奏されたり、ある時はいっしょに変奏されたりして、壮大な変化に富む変奏曲に仕上げられている。このような独自の変奏曲は、おそらくそれ以前には見られなかったものであろう。

一方、この曲の楽器編成は、前2曲よりもホルンが1本だけふえただけで、そのほかにはチェロとコントラバスが完全に独立的に用いられるようになったが、その管弦楽の豊かで色彩豊かな響きは前曲の比ではない。それだけ管弦楽法に急速の進歩を示したといえよう。なお作曲年代は、おもに1803年から翌年にかけてである。

交響曲 第5番 短調 作品67

ベートーヴェンの第5番は、古今のあらゆる交響曲の中でもっとも有名な作品だが、また交響曲の歴史の上からいっても重要な位置を占める曲といえる。第3番「英雄」を完成したあと間もなく作曲に着手したが、1806年には第4番を一気に完成し、その後ふたたびこの曲に取組んで結局1808年の初めころまでには完成したといわれる。ベートーヴェンは彼の創作中期の、しかもその前半の時期に、音楽における新しい試みを次々に意欲的にこなしたが、その中には19世紀ロマン派の音楽に大きな影響を与えた要素も少なくない。

この第5番でもっとも注目されるのは、全曲を1つの中心的な主題あるいは動機によって統一しようとする楽曲の構成法である。第1楽章冒頭に示される有名な動機は、この楽章の第1主題を構成しているばかりでなく、第2主題部にもしつこくつきまとい、第1楽章全体をもこの動機によって緊密なまとまりをもった説得力の強いものになっている。しかしそればかりではなく、さらに第3楽章スケルツォの主題の第2主題をこの動機から派生した音型で構成するとともに、第4楽章の第2主題にもこれと関連した動機を用いている。

このような1つの主題あるいはその動機によって全曲を統一していくこうとするやり方は、19世紀ロマン派の音楽構成法の主流を占めるようになる。たとえば、ペルリオーズの幻想交響曲における「固定楽想」と、自由化という点が指摘できよう。第1楽章のソナタ形式では、主題提示部が充実して長くなったのに加えて、展開部の発展がより入念になり、しかもここにさらに新しい動機を加えているために、展開部の提示

っている。

また第3楽章と第4楽章を休みなぎりで演奏するという構成をとったことも、交響曲史上初めてのことである。しかもその50小節にわたる5移行部は、ベートーヴェンの音楽の中でもっとも緊迫感を秘めた、見事な効果をもつ音楽となっている。第3楽章スケルツォの主題の再現を途切れるような弱部で終始したあと、移行部の50小節のうち42小節までを最弱音で無気味な緊迫感を最高度に盛り上げ、最後の8小節で堰を切ったように一気に最強音にもっていくあたり、その効果はまことにすばらしい。もやもやとした暗の中から一筋の光明が現われたかと思うと、それが一気にここにちか近ずいてきて明るい世界が眼前に広がる、そんな感じを与える。

交響曲 第6番 へ長調 作品68
「田園」

第6番「田園」は、第5番完成後間もなく相対して1808年に作曲されており、その点で第5番と反生児のような作品ではあるが、その内容はまったく異なっている。激しい気迫と緊迫感をもった力強い第5番に対して、この曲はなんと明るく平和な気分をもっていることであろうか。そしてこの第6番は、第5番とはまた違った新しい試みかみられる点でも注目される。

その一つは、ベートーヴェン自身この曲に「田園」という題名を付けたばかりか、各楽章にもそれぞれ着いたような標題を記していることである。

第1楽章 田舎に暮らした時に起る朝や夕やかな感情のめざめ
第2楽章 小川のほとりの情景
第3楽章 田舎の人々の楽にふける集い
第4楽章 雷雨、嵐
第5楽章 牧人の歌。嵐の後の喜びしい

感満の気持

ベートーヴェン自身この曲に〔「田園交響曲」描写というよりは感情の表現〕と書いているように、そうした標題を自分の感情を通して表現しようとしたことは、それ以前の交響曲には見られなかったことだが、またこれが19世紀ロマン派の標題音楽の先駆になったと考えられる点でも重要である。またここに表現されている音楽は、ベートーヴェンがこの曲を作曲したウィーン郊外のハイゲンシュタットやそこにあるペートルヴェンの小荘と呼ばれる小川のほとりの道を散策することにより、いっそう理解しやすいものになることも事実である。

もう一つは全曲の構成の問題で、この曲は珍らしく5楽章に分かれており、しかも最後の3つの楽章はそれぞれ休みなぎりで演奏されるようになっている。しかもこの部分は全体にわたって田園での生活の様子を表した単一楽章とも考えられ、その点で交響曲の様式の自由化の方向が顕著にみられるものの一つである。またベートーヴェンの交響曲の中で唯一の例である。

なお、初演は1808年12月22日にアン・デア・ウィーン劇場で、第5番とともに行なわれたが、その時には最初に演奏されたこの「田園」が第5番、最後に演奏されたハ短調が第6番の番号が付けられていた。

交響曲 第7番 イ長調 作品92

ベートーヴェンは創作中期の最後の時期の1812年に、相対して二つの交響曲を完成させている。このうち第8交響曲は、古典的なものへの復帰をも感じさせるような明快で魅惑的な作品だが、この第7番は中期の最盛期の音楽にも共通したベートーヴェン特有の激しく力強い推進力や、未だ衰えていないのを強く感じさせる。

かつてリストが「リズムの極化」と呼び、ワーグナーが「舞踏の極化」と評したように、この曲の各楽章を一貫して支配しているのは、常に音楽の根底に流れているリズム・パターンであるといえる。そしてそれが全曲を緊密な統一へと導いている。たとえば第1楽章のヴィヴァーチェの主題では、第1主題のもつ基本的なリズムが楽章全体を支配しているため、第2主題の影が非常に薄れてしまっている。しかしそれが逆に全体を一つのすばらしいまとまりに導いているといえる。

またこの曲のもう一つの大きな特色は、ベートーヴェンの指定によれば、緩徐楽章のない交響曲である点にある。すなわち通常ゆるやかな楽章となるべき第2楽章をアレグレットとしているからである。そのために、この交響曲の演奏にあたっては、この第2楽章のテンポをどれくらい速にするといいのか大きな問題となっている。実際にこの楽章のテンポだけは、現在でも指揮者によってたいへん違っている。因みにこれ

までの演奏では、ヘルベルト・フォン・カラヤンはもっとも速い方に属し、カル・ベームはもっとも遅い方に属している。しかもその違いはいへん大きなもので、カラヤンがだいたい速い時で76くらいで演奏するのに対して、ベームは75.4ほどの遅さである。そしてさらに不思議なことに、そのどちらのテンポによる演奏も、聞いている人たちとも思われる魅力があるのだから、何とも不思議な楽章である。

また、この第2楽章のテンポの設定は、第1楽章の序奏部（ボコ・ソステヌート）や第3楽章のトリオ部（主部のプレストに対してアッサイ・メノ・プレスト）のテンポのとり方や何か関連しているように思われる。要するにまったく緩やかな部分のない交響曲として一気に演奏していくか、あるいはその中でもたかなりのテンポの変化を加えていくかの問題であろうか、何ともあれ、リズムとテンポに関心のない人々へ興味のある問題を提示している交響曲であるといえる。

フランスの演奏に慣れたペルリオーズ



[モーツァルト／シューベルト／ブラームス／ワーグナー／R.シュトラウス]

モーツァルト

交響曲 第29番 イ長調 K.201

モーツァルトのK.201の交響曲は、同じ頃作られたK.183の交響曲とともに若きモーツァルトの傑作として知られている。K.201はイ長調であり、K.183はc小調であるが、長調と短調の同じような性格の対比は晩年の傑作、もうひとつのト短調交響曲K.550とハ長調交響曲K.551「ジュピター」との対比にも相応するものであるといえる。モーツァルトの数多くの作品のなかでも、短調、とりわけト短調やニ短調で書かれた作品は彼の心の奥深い悲しみを表出しているといわれる。K.201は774の交響曲やニ短調の諸作、例えばオペラ「ドン・ジョヴァンニ」を駆け抜けそのことはすぐわかるはずであるが、しかしモーツァルトのこのような悲しみの側面は、またその対照をなしているのであるが、このような性格の異なる音楽が同じ時期に書かれているところにモーツァルトの個性の力や力がかかるといえる。K.201は1774年の春ザルツブルクで書かれているが、その前にもこのウィーン旅行（1773年7月～9月）でのウィンドルの影響や、ハイデルの弟ミハエル・ハイデルの影響もうけている。モーツァルトが、次第にギヤラントな音楽を書くようになっていた時期の作曲であるが、特にミハエル・ハイデルが1773年春に作曲したイ長調交響曲との連関が指摘されるが、楽想その他充実した、いかにもモーツァルトらしい秀れた交響曲になっており、以後の諸作、例えば1781年時代の交響曲などをともに予告するほどのものになっている。第1楽章アレグロ・モデラート

ト、4/4、イ長調、ソナタ形式。第2楽章アンダンテ、3/4、ニ長調、ソナタ形式。第3楽章メヌエット、アレグレット、4/4、イ長調、三部形式。第4楽章アレグロ・コン・スピリト、4/4、イ長調、ソナタ形式。

シューベルト

交響曲 第8番 短調「未完成」

シューベルトの交響曲ばかりでなく、古今の数多くの交響曲のなかでもとりわけ広く親しまれ、名曲とされている。それは楽曲の秀れた内容によるものであるとともに、「未完成」という名が示しているように曲が未完で終っていることにもよるといえる。曲が交響曲の正規の形である4楽章のものとしてはついに完成されず、第1および第2楽章が書きあげられただけままだにされているところから、その未完の理由をめぐってさまざまなエピソードが語り伝えられ、あるいは映画のタイトルにもなっているものの興味をそそいたからである。この作品が未完に終わった理由は不明であるが、第3楽章はスケッチが残された、また9小節めまでがオーケストレーションされているが演奏されるのは2楽章までである。曲は1822年秋に作曲がはじまれているが、シューベルトはこの曲の第1・第2の2つの楽章を、彼を名誉会員にしたシエスタリア音楽協会に1824年に届けたい。名誉会員に推された返礼として交響曲を献呈したのだが、楽譜を受け取ったヒュンツレンナーは、そのうちに残る2つの楽章も属くものと思つて机の引出しにしまっておき、ついにそのまゝ1865年に再発見されるまで、この曲は人知れず眠っていたのである。「未完成交響曲」は、きわめてロマンティックな詩情をたたえているが、その第1楽章はしばしば現世的美を、また第2楽章は彼岸的な永遠の美を響かせているといわれる。第1

楽章の主題がウィーンの民謡風な性格をおびているからであろうが、全体に憧れを誘うような楽想をとり、ブルックナーやマーラーの交響曲の先駆をなしている。また、シューベルト特有の転調による和音の陰影や、幾分暗いペシメスティックな面なども、曲の魅力のひとつになっている。第1楽章アレグロ・モデラート、4/4、短調、ソナタ形式。第2楽章アンダンテ・コン・モト、4/4、ホ長調、ソナタ形式。

ブラームス

交響曲 第2番 ニ長調 作品73

交響曲第1番の作曲に多年を要したのに対して、ブラームスはその第2交響曲を一気に書きあげている。第1交響曲でもって、ベートーヴェンの9つの交響曲に続く位置を獲得すべく、ブラームスは交響曲という分野の新しい地帯を拓くことに苦闘をくり返していたのだが、交響曲第2番は1877年夏、4ヶ月ばかりの間に作曲している。あるいは交響曲第1番を書きあげることによって、気分的にも楽になっていたのかもしれない。ともあれ、交響曲第2番はベートーヴェンの第6交響曲に対置させられて、しばしばブラームスの「田園交響曲」とも呼ばれている。もちろん、具体的な自然の描写がなされているわけではないが、この曲の性格がいかにも自然に包み込まれたのびやかなものを感じさせるからである。オーケストラの扱い方も第1交響曲とはかなり違い、種々の楽器の色彩豊かな用い方や対比的な用法なども田園的な感興を高めているであろう。夏のヨーロッパ、あるいはドイツの夏は、日本の夏とは大分異なる。まず湿度が低く、からりとしてさわやかであり、強い日射しの日光が照りつけたいわゆる井沢の夏によく似ている。ブラームスは、この作品をヴェルター湖畔の森に囲まれた静

かなベルチャッパで書きあげている。深い森と湖、それに夏の太陽がおそくはブラームスに明るくのびやかな気分をもたらしたのであろう。ブラームスの4つの交響曲は、それぞれ異なる性格をもち、ブラームスの内面をそれらに表出しているのであるが、そのなかでも流麗なメロディーでめづられた第2交響曲は特に明るく晴やかな性格の備えてあるといえるであろう。第1楽章アレグロ・ノン・トロバド、4/4、ニ長調、ソナタ形式。第2楽章アダージョ・ノン・トロバド、4/4、ホ長調、三部形式。第3楽章アレグレット・グラチオソ（ワグネル・アンダンテ・グロ）、4/4、ホ長調、歌謡形式。第4楽章アレグロ・コン・スピリト、4/4、ニ長調、ソナタ形式。

ワーグナー

「トリスタンとイゾルデ」より
前奏曲と愛の死

〈トリスタンとイゾルデ〉は、ワーグナーの舞台作品のなかでも特に人気のあるものである。ワーグナーの思想の根柢を、最も端的に、かつ最も鋭く明瞭にコンパクトな形で表わしているのがこの作品で、〈トリスタンとイゾルデ〉が理解されれば、難解な（といわれるだけでストーリーが複雑ではあっても本質的には平明な）ニベリングの指環を観ることもワーグナーの音楽を楽しむといえる。〈ニベリングの指環〉作曲中に新たな構想を得て作曲されたのがこの作品であるが、中世伝説に根拠する男女の悲恋物語を歌いあげながらも、ワーグナーはこゝにいっしょに人間存在の真理といったものを意識している。主君マルケの妃イゾルデと深い仲におちいったトリスタンは、最終的には自から死を選んでマルケ王の臣下メロートとの決闘に破れる。傷ついていた死の床に横たわるトリスタンのもとにイゾルデがかけつけてくるが、トリスタン

はそこを切れ、イゾルデも皆の前で有名な愛の死〈優しくかすかな彼のほほえみ〉を歌って忘我のうちにくすおれる。ストーリーのごく骨格をぬき出せばそういうことになっているが、ワーグナー自身の手になる音楽を読むと、それはきわめて意味の深い思索をたたえた言葉であることがわかり、単純な男女間の恋物語ではすまないものであることが納得されるのである。中世伝説の方は、日本語ではベディエの〈トリスタン・イゾルデ〉やルージュモン〈愛について〉によって知ることができ、さらにワーグナーの音楽に対してよくい合に出されるニーチェの〈悲劇の誕生〉は、しかしギリシア哲学などとの連関のうえで考えられなければならないものである。ともあれ、人間存在の深い淵から光を求めて憧れのはるような前奏曲冒頭のモチーフが、この音楽劇の本質的なものをよく表現しているといえる。中世伝説では恋の酒めのためには2人は結びつたもののひとつになっているのもっと精神的な根源からの求めあいを通じて、愛が高揚されているのである。

R. シュトラウス

交響詩〈ドン・ファン〉

交響詩〈ティル・オイレンシュ
ベルグの愉快ないたずら〉

リヒャルト・シュトラウスは後期ロマン派の代表的作曲家であり、交響詩やオペラ、歌曲などを残しているが、その創作活動の前半には交響詩を多く作り、後半にはオペラを集中的に作曲している。交響詩は、ごくおりきて言えば一種の描写音楽であるが、シュトラウスはさまざまな気分であれ、あるいは詩の内容であれ、とにかく何等かの具体性をおびたものを音楽で表わすのに秀れていた作曲家である。ごく若い頃

の交響詩〈死と変容〉を聴いた批評家ハンズリックは、この作曲家の天才はオペラにむいている、といった評を書いたのだが、そのすぐあとでシュトラウスはオペラの作曲にりかかっている。交響詩の、余りに生々しい表現力が、ハンズリックにオペラの舞台を思わせるのに足りないが、シュトラウスの才能はそれほかに鮮烈なイメージをよびますのである。交響詩は、リストによって創始された一楽章形式の器楽曲で、何等かのプログラムを持っている。op.20の交響詩〈ドン・ファン〉はハンガリーの詩人ニコラウス・レーナウの叙事的・劇的な同名の詩にインスピレーションを受けて作曲されたものであり、「ドン・ファン」の詩人ニコラウス・レーナウの叙事的・劇的な同名の詩にインスピレーションを受けて作曲されたものであり、「ドン・ファン」といっても理想の女性を永遠に求める理想主義的な内容になっている。理想の女性をも得られず、ついに最後は暗く冷たい闇に閉ざしてしまう。1888年、24歳の作であるが、彼の幾つもの交響詩のなかでもとりわけ秀れたもののひとつになっている。op.28の交響詩〈ティル・オイレンシュベルグの愉快ないたずら〉は、ドイツの民謡取材したものであり、14世紀ドイツのいたずら者ティルを扱った作品である。曲頭フルートで奏されるのがティルの主題で、あとはその数々のいたずらを描いてゆくという形になっている。最後は捕まって死刑になってしまふが、そのころは小次郎と義経の敵討ちを響きあわせるアラスの吹奏などで表わされている。

イゾルデの愛の死「優しくかすかな彼のほほえみ」

Mild und leise
wie er lacht,
wie das Auge
hold er öffnet,
seht ihr's, Freunde?
Sah't ihr's nicht?
Immer leuchtet
er wie leuchtet,
sternumstrahlend
hoch sich hebt?
Seht ihr's nicht?
Wie das Herz ihm
mutig schwillt,
voll und hehr
im Busen ihm quillt?
Wie den Lippen,
wonnig mild,
süßer Atem
sanft entweht:—
Freundet Seht!
Fühlt und seht ihr's nicht?
Hört ich nur
diese Weise,
die so wunderbar
voll und leise,
Wonne klagend,
alles sagend,
mild vernehmend
aus ihm töndet,
in mich dringt,
auf sich schwinget,
hold erhallend
um mich klingen?
Heller schallend,
mich umwallend,
sind es Wellen
sanfter Lüfte?
Sind es Wogen
wonniger Dufte?
Wie sie schwellen,
mich umrauschen
soll ich atmen,
soll ich lauschen?
So ich schlürfen,
untersuchen?
Süss in Dufte
mich verhauchen?
In dem wogenden Schwall,
in dem tönenden Schall,
in des Weitaumes
wehendem All,
ertrinken,
versinken,
unbewusst,
höchste Lust!

やさしく静かに
微笑み
おだやかに彼が
目をあけてはくれるのが、
わかるでしよう。皆さん、
それとも誰にもみえないのかしら。
しだいと明るくなるまじで彼の
輝く光っているのが、
星のように西風に光り輝きながら
高くへを立ちゆくの、
わかななの。
その心はなおも
力強く鼓動し、
胸のうちにびくびくしているの。
その唇には、
甘いおだやかな
甘い息が
静かにかきよってくるのに——
皆さん、そうでしょう。
それとも気づきもしないのかしら。
あれほどに
素晴らしいとそうしてかきよける、
恍惚として数響きを訴え、
すべてを語りながら、
やさしくなだめるようにの、
彼のなかから芳気を発し、
私をなやまして響き入り、
高い、高い、
やさしく響きつつ
私を抱きかかると、
この胸を聴くのかしら。
私だけののしから。
それより晴やかに鳴りつつ、
私を取り囲むのは、
そとと突くくる
風の波なのかしら。
快く渡る
うねり寄せる波なのかしら。
私の波が高まり、
私のまわりを打ち寄せるのを、
私は聞かなくてはならぬ。
私は耳を澄ませて聴いたらよいのか。
すすり込んで、
探りまわつたよいのか。
それとも無邪気に抱きかかると甘やかに
溺してしまふのかしら。
さかさまく浪のなか、
無なる響きのなかに、
世界の息の
突かすう万有のなかに、
おちゆく、
沈みゆく、
われ知らず、
あれ、無上の喜び。

(丸山桂介・訳)

Technics

S席の感動を伝えよう。

コンサートの感動を再現するためには
粒よりのコンポーネントが必要です。

D.D.オートプレーヤ サイドtoサイドのアンブ°

そして、リニアフェイズスピーカ。

選びぬかれたコンポーネントがハイバランスの
思想でシステムに結集したV55。

あなたのお部屋にS席の興奮をおとどけします。



- この写真は別売のアクセサリを組みこんだTechnics VS55〈タナ型〉のシステムアップ例です。
- レコード演奏時に便利なライト付です。

Stars of Components
コンポの星

STAR OF SYSTEM COMPONENTS



●この写真は対空のアクセサリーを組みこんだTechnics V55(旧コ型)のシステムアップ例です。

V55.....合計 174,000円

ダイレクトドライブオートプレーヤ●SL-1700

標準価格 **44,800**円

FM/AMチューナ●ST-7300

標準価格 29,800円

プリ・メインアンブ●SU-7700

標準価格 45,800円

スピーカシステム ●SB-4500 標準価格 26,800円+税

(2本)標準価格 53,600円

別売品 (V55をシステムアップするアクセサリ)

ステレオカセットデッキ●RS-630U-II 標準価格55,800円

オーディオタイマー ●TE-903	標準価格13,500円
2チャンネルステレオ ●FAM-220	標準価格 9,200円

ヘッドホン・アンビエンス・コントロール ●SH-3040 標準価格19,800円

EC型単一指向性マイクロホン●RP-3540E 標準価格 7,800円
マイクとモニタングアダプタ●SM-2030 標準価格 7,500円

ブームスタンド ● RP-3033 標準価格 11,000円

ミニマイクスタンド●RP-3010	標準価格 2,500円
ミニマイクスタンド(金剛製)●G1-B25	標準価格 28,000円

オーディオラック〈目コ型〉●SH-895 標準価格28,000円

スピーカー置台(2台1組)●SH-777	標準価格 3,000円
スピーカー置台(2台1組)●SH-774	標準価格 2,000円

オーディオケース(1個)●SH-301	標準価格 2,000円
オーディオブック(3個1組)●SH-306	標準価格 700円

カートリッジ ●205C・II L/205C・II H 標準価格23,000円

●オーディオラック<タテ型>はテーブルタップ付、オーディオラック<ヨコ型>はスピーカ置台付です。

●あなたが録音したものは、個人として楽しむなどの場合は、著作権法上、権利者に無断で商行為等に使用することはできません。

選べるハイアップ タテ・ヨコ6タイプ 姉妹機 V33・V77

選べるカラフルなカラダ 30代から 鄭琳麗 V35 V77

全日本は札幌から沖縄まで、全国36都
 市を結ぶ大きなネットワーク。そして
 1日に約450便。81機のジェットファミリー
 が大活躍しています。また、1日
 にお迎えするお客さまは、
 平均約4万人、年間では



1,500万人にもなります。これは国内では第1位、世界でも第7位という大きな実績です。全日空は、これから、こうした多くのみなさまの信頼にこたえ、快適な空の旅をおとどけてまいります。

大きな翼
全日空
ALL NIPPON AIRWAYS



The action-oriented world trader
NISSHO-IWAI
 Trade Head Office: (Tokyo, Osaka, Yokohama, Nagoya, Sapporo, Fukuoka, etc.)
 Osaka Head Office: (Kobe, Kyoto, Nara, etc.)

SOGO SHOSHA Modern Japanese abstract calligraphy is a unique art form that can dramatically express the most profound aesthetic feeling and at the same time suggest the meaning of the original Chinese characters. The example here is a calligraphic rendition of the characters for sogo shosha, usually translated as general trading company.

Traders who do more than trade

The English expression hardly does justice to the vast scope and diversity of Japan's sogo shosha, of

which Nissho-Iwai is a leading example. Beyond mere buying and selling, they engage in such wide-ranging activities as third-country trade, basic resources development programs, long-term financing, technical aid, and a wide variety of joint ventures.

Nissho-Iwai's worldwide network and information system keeps us in constant touch with product and market conditions everywhere. To put our global experience and trading know-how to work for you, contact the nearest Nissho-Iwai office.

Other Overseas Offices in London, Hamburg, Dusseldorf, Paris, Milano, Wien, New York, Chicago, San Francisco, Los Angeles, Vancouver, Toronto, Montreal, Rio de Janeiro, Sydney, Melbourne, Hong Kong, Singapore, Teheran, Beyrouth, Lagos and 100 other major cities all over the world.

ソ連の三大バレエ団!! ポリショイ、レニングラードと並ぶ名門!!
 詩の国ウクライナより大挙来日!! 装置一切キエフより直送!
 豪華ソリスト陣、みごとな群舞!! 優雅・華麗・あふれる詩情!!

キエフ・バレエ

近日発売!!



チャイコフスキー 白鳥の湖 全4幕
 チャイコフスキー くるみ割り人形 全2幕
 スコリススキー 森の詩 全3幕
 ラヴェル ボレロ・バレエ名作集
 ◎公演予定
 ●白鳥の湖
 7月29日(金): 東京文化会館
 7月30日(土): 東京文化会館
 7月30日(土): 大板フェスティバルホール
 8月4日(木): 京都府会館
 8月5日(金): 和歌山県民文化センター
 8月6日(土): 大阪フェスティバルホール
 8月7日(日): 大板フェスティバルホール
 8月8日(月): 岐阜市市民会館
 8月9日(火): 名古屋市市民会館
 8月10日(水): 松本市市民会館
 8月11日(木): 新潟県民会館
 8月13日(土): 東京文化会館
 8月13日(土): 東京文化会館
 8月24日(木): 福島県文化センター
 8月25日(金): NHKホール
 8月26日(金): 東京厚生年金会館
 8月27日(土): 宝塚市市民会館
 8月29日(月): 神奈川県民ホール
 ●くるみ割り人形
 7月28日(木): 東京文化会館
 7月31日(日): 神奈川県民ホール
 8月3日(水): 大板フェスティバルホール
 8月14日(日): 千葉県文化会館
 8月15日(月): 東京文化会館
 8月16日(火): 東京文化会館
 8月18日(木): 宮城県民会館
 8月19日(金): 八戸市公会堂
 8月21日(日): 北海道庁総合庁舎
 8月23日(火): 岩手県民会館
 ●森の詩
 7月27日(木): 東京文化会館
 8月2日(火): 大板フェスティバルホール
 ●バレエ名作集
 8月17日(木): 東京文化会館

ソ連の誇る天才ピアニスト!! グリゴリー・ソコロフ



5月20日(金) 7時
 東京郵便貯金ホール
 シューベルト
 ソナタ 変ロ長調 演奏 D.960
 スクリャービン
 ソナタ 第1番 へ短調 作品6
 プロコフィエフ
 ソナタ 第3番 イ短調 作品28
 5月23日(月) 7時
 大阪毎日ホール
 『ショパンの夕』
 24の前奏曲 作品28
 12の練習曲 作品25
 ●5月22日(日) 山口市市民会館
 ●5月25日(水) 函館市市民会館
 ●5月27日(金) 新潟市市民会館

全世界注目のソ連の名ヴァイオリニスト!! ギドン・クレメル

ピアノ: オレグ・マイゼンベルク
 6月10日(金) 7時 日比谷公会堂 / 6月14日(火) 7時 大板毎日ホール



バグナ
 ショコンヌ ニ短調
 シューベルト
 ソナタ イ長調「二重奏」作品162
 ショスタコーヴィチ
 五つの前奏曲 作品34
 シニツケ
 前奏曲「ショスタコーヴィチの思い出」
 ペートルヴェン
 ソナタ 第10番 ト長調 作品96

ゲオルク・ショルティ指揮 **シカ**

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 1977年日本公演プログラム ●表紙デザイン=高崎敏武/レイアウト=玉井収/編集・発行=新芸術家協会 ©1977 Printed in Japan